
Christmastide

三端ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Christmastide

【コード】

N9456T

【作者名】

三端ジュン

【あらすじ】

表向きはビル清掃管理会社のオーシャン・クリンサービス。女社長のマリーの元で働くのは冴えない中年男の黒谷陽人と、お調子者の古賀平助。

小さな会社だが、そこには裏の顔がある。ジョーカーと言う名の殺し屋による、また別の意味での清掃業者だ。

陽人がターゲットの一人息子、見た目は可憐な美少女のひな太に形見の指輪を届けたことが切っ掛けとなり、出会った2人は互いに惹かれあうようになる。

謎の組織とのつながり、不思議な力。そしてジョーカーに託された
本当の意味での依頼内容が明らかになる。クリスマスに起きた一つ
の出会いと別れの話。（個人サイトで連載しているものです）

12月某日

12月。町は色鮮やかなイルミネーションが輝き、普段の殺伐とした空気も幾分か和らいでみえた。

繁華街のテナントビルの4階にある小さな事務所、オーシャン・クリーンサービス。

オフィスの清掃、管理を主に請け負っている。

看板には海をイメージしてか、イルカをモチーフにした会社のロゴマークがあり、

丁度同じものがモップをやる気なさげに動かしている、黒谷陽人のシャツの左胸にも入れられていた。

「陽人、真面目にやんな！そんなんじや綺麗にならないよ！」

「んーだよちゃんとやってんじゃん、帰ってまで掃除するなんてゴメンだぜ全く」

「自分とこのビルが汚れてるなんて話になんないでしょうが！」

窓際のデスクで新聞を広げ、古賀はそんな二人のやり取りを見ていた。

「12月だったのに、ウチはヒマだね」

「古賀、営業のアンタが何言ってるのよ。もう」

陽人と古賀は横並びにお互い顔を見合わせる。先ほどから二人に口うるさくダメを出していたマリーは

急ににっこりと微笑みを浮かべて言った。

「今度仕事の依頼が入ったら、クリスマスイブは豪華なパーティーにしてあげるわよ」

「三十路超えたオッサン2人に年齢不詳のババアでかよ、たまんないぜ」

「古賀、何か言った？」

「いやー別に」

陽人の手が完全に止まっているのを、マリーがハイヒールの先でモップを蹴りつけた。

「痛って！」

「サボんじゃないよ！」

オーシャン・クリーンサービスは、潔癖症である女社長のマリーが趣味で営業しているものだ。

契約している物件は今のところ片手で足りる程しかない。

それは表向きの話であって、ここにはもう一つ、裏の顔があった。暴力事件には事欠かないここ向壁町で、よりスマートな手段を求める声に答えたビジネス。殺人や、それに準ずる類の依頼を請け負う、また別の意味での清掃業者だ。

マリーの携帯から聴き慣れない着信音が鳴り出した。

一気に3人の間に緊張した空気が流れる。

その番号は裏の仕事依頼専門で、特殊なルートを通じて以外入手することが出来ないものだ。

通話ボタンを押したマリーは、まるで機械音声のような声で応答した。

「こちらは、オーシャン・クリーンサービス。貴方は”ジョーカー”に御用の方かしら？」

マリーが事務所の奥にある部屋に移動するのを見送った陽人は、ポケットから探り出した煙草に火を点けた。

「忙しくなる、かな？」

古賀がそう呟く。

ふう、とため息と共に白い息を吐き出しながら、やれやれといった顔つきで陽人が答えた。

「クリスマスだってえのにツイてねえ奴だ」

しばらくして、マリーがプリントアウトした書類を持って帰ってきた。

添付された写真には一見して気の弱そうな、平凡な印象の男が写っている。

「ナイフによる刺殺をお望みのようよ。この男に近づいて、データの入ったディスクのありかを吐かせるの。」

出来るだけ早い期間に、日付指定が利くのならその分上乘せもする、と」

マリーは陽人に資料を見せた。古賀がそれを覗き込む。

その中にはターゲットの詳細が書き込まれていた。

「どうかしら？」

「めんどくせえ客だな」

古賀が男についての一文を読み上げた。

「金井沢病院勤務、事務員。妻とは6年前に死別、現在中学生の息子あり」

陽人は大雑把に目を通し、丸めた紙の束をマリーに返した。

「クリスマススイブ、それでいいか？」

「あらあら、ロマンチスト」

「ついてねえ奴にはサイコ のプレゼントだろ」

「それじゃあ、この条件で契約は成立ね。上手くいくことをお祈りするわ、ジョーカー様」

陽人は苦笑いを浮かべた。

「なあマリー、その名前は勘弁してくれよ。ガラじゃねえや」

「あら、ステキじゃない」

久し振りの大口の仕事にマリーは上機嫌のようだ。

殺し屋ジョーカー、陽人にそんなあだ名を付けたのは彼女だ。

冷やかす古賀に、照れ隠しに陽人は頭を掻いた。

それぞれの事情

その決行日までは今日もまた同じように。

ようやく掃除から解放された陽人は、シャツの上に赤いダウンジャケットを羽織った。

「なあ、俺気になることがあるんだけど」

古賀が同じように着替えを済ませて、ビルを出る時間は同じだった。

「ちよつと付き合え！」

「て、なんだよ」

飯でも食いに行こう、そういいながら古賀は先導するように歩き出した。

外はもう薄暗く少し雪がちらついている。

古賀の選んだ店は小さいながらもこの時間、それなりの客で賑わっていた。

セルフサービス形式で、定食の載ったトレーをカウンター席に置くや否や、古賀が口を開いた。

「お前つてさあ、24日、何も予定ないわけ？」

「あー」

クリスマスイブに依頼を受けたことを言われているのだ。陽人はふう、と息を吐き出す。

「どーせ俺はモテねえよ」

「陽人、もっとこうちゃんとしたカッコしろ、っーかヒゲ剃れヒゲ。せっかくそこそこカッコいいのにもつたいねーよ」

古賀が面白がって言う。陽人もだらしのない自覚はあるのだが。

そういう古賀こそ浮いた話を聞かなかったが、そこに突っ込むのは止めておいた。

「っーか平助、話ってそんなことかよ」

古賀は生卵の入った小皿をかき回しながら、少し言い淀んだふうだった。

「クリスマスは、おまえにとっちゃあ嫌な思い出しかないよな」

古賀は陽人を見つめている。ただその一言だけで、陽人にも同じ人物のことが思い出された。

「けどそうじゃねえ奴の方が多いさ。お前ってさあ、やる相手がどんな奴か知りたくねえって思ってたんなあ？」

「んなもん、俺が気にすることじゃねえだろ。いつやろうが変わんねえよ」

「そりゃそうだけど。そーじゃなくってな、お前は、本当はそういうのわかっちゃうのが嫌なんだよ」

「ずず、と温くなったお茶を啜りこむ。急に古賀がさっきまでとは違う調子で切り出した。

「悪い、飯がマズくなっちゃうわな。この話はあとあと」
人目のあるところではまずいと思いついたのだろう。

定食の残りをかき込むと、店を後にした。

古賀はこの後寄りたい所があるのだと言う。特に予定もなかった陽人は付き合うことにした。

人通りの余りない通りに来たとき、古賀が再びあの話題を持ち出してきた。

「斉藤は真面目な男でさ、仕事が終わったら家までまっすぐ帰ってるんだと。大体いつも同じ時間に、同じところを通るよ。」

まあ一人で子どもの面倒みてるつつうのもあんだろっけど」

古賀は数枚の写真と、地図を広げて見せた。街灯の下で見えにくい

いが

その斉藤の通勤ルートでの、穴場の写真なのだろう。

「サンキュー、平助」

「陽人が24日つつうからさ、これでも頑張ったんだぜ俺。地味な奴だし、悪い噂はきかねーなあ。そんな奴が一体何やらかしたんだろっな」

陽人は腕時計を確認した。写真の場所を通りかかるのは丁度今くらいの時刻だ。

「下見に行くなら、付き合っせ」

「いや、いい」

「もう一個、気になってることがあんだけど」

古賀は少し真面目な表情を浮かべた。

「金井沢病院、って、寧々の居たこと関係あんだよな？」

陽人はしばらく黙った後で、そうだ、と短く答えた。

スーパーに用がある、と言った古賀はペットフードのコーナーに立ち寄った。

幾つかのシュリンクタイプの猫缶をカゴに放り込む。どれでもいいというわけではないようで、

銘柄は指定されているようだった。

「これ買ってこいって頼まれてんだ、忘れるとこだったぜ」

マリーは捨て猫を見ると放っておけない性質で、事務所には既に数匹の猫がいた。

陽人達には見分けがつかないが、名前までちゃんと付いている。

その中でもお気に入りだという黒猫を彼女が抱いているのをよく見かけた。

「ああ、あの、なんだっけか。やっつこしい名前のいたよな」

「オプシディアン」

「おぶ、」

「だっせえ」

「ってうっせえな！」

それから後は、自分たちで必要なものをいくつか見繕って歩いた。

陽人が青果コーナーで掴んだカリフォルニアオレンジを、古賀に向かって投げた。

彼はそれを受けとめる。手の平の中、投げて器用にキャッチ。

依頼人

クリスマススイブ。今にも雪が降り出しそうな寒空の下、陽人は腕時計を確認した。

そろそろ、例の男が通りかかる時間だ。

しばらくして陽人は裏通りに入り込んでくる人影を見た。

街灯に照らしだされたその顔は、写真の男に間違いなかった。

辺りに他の人の気配がしないのを確認すると、背後から声を掛けた。

「斉藤正幸だな」

その声に男がびく、と体を強張らせた。陽人は同時に背中にナイフを押し当てている。

「おっと、大声を出すのはナシだ。妙な動きはするな、命が惜しかったらな」

男は振り向かずに答えた。

「貴方が、ジョーカーなのか」

「ああ？」

怪訝そうな声を上げる陽人に、斉藤は静かに、と呟いた。

「ああ、すまない。今日この時間に、私を殺すように依頼をしたのは、私なんだ」

「何？」

「ちょっといいか、と陽人に言い、振り返った男は紛れもなく斉藤本人だった。

写真通りの地味で、穏やかな表情を浮かべている。

「はっ、アンタが自分で、ワザワザ金出して俺を雇ったってのかい。一体何のつもりなんだ？」

「君に話したいことがあるんだ。刺殺、と指定しておけば遠くから狙われることはないだろう？少し不安だったからデータ云々付け足

しはしたが、まあこれは方便だ」

訳がわからず、陽人は一旦ナイフを下げた。斉藤が体の力を抜くのがわかった。

「私は、近いうちに本当に、何者かに命を狙われるだろう。わかっているんだ。私は、余計なことを知り過ぎた。

それは仕方がないことだ」

斉藤はそこで一旦言葉を区切り、辺りに誰もいないのを確認した。それから、ビルの間の狭い路地に移動するように言った。

「私一人を狙われるのは別に構わない。ただ私が生きていることで息子まで危険に晒してしまうのは避けたい。

連中に口封じに殺されたのだとわかればいいんだ。ああ、心配しないでくれ。金はさっき全額振り込んできた」

指定の口座には前金としてすでに一部の金が振り込まれていた。決して安くはない金額だ。

いったい何がこの男をここまで追い詰めているのか、そしてその割には斉藤自身、やけに穏やかなのが気にかかった。

そうそう、と何かを思い出したように、斉藤は胸ポケットから小さな箱を取り出した。

「間に合ってよかった。さっき言ったが、私には今日で15になる息子がいるんだ。これは妻の形見だが、丁度修理が終わったところだ」

中を開いて見せた。そこには紫色の石をあしらった指輪が入っていた。

「お願いだ、これを、息子に渡してやってくれないか」

「……俺には、関係ない話じゃねえか」

斉藤は笑う。

「君は、そういった義理は果たす男だろう？」

斉藤は陽人を見つめている。その目が、まるで何もかも見透かしているかのように思えた。

最初に思っていたような、冴えない中年男のそれではない。

自分を殺そうとしている、それも自らが望んでのことだ。

陽人には愈々訳がわからなくなった。

「アンタは、何を見たってんだ」

斉藤が表情を曇らせる。

「それは、言えない」

「さつきからなんだよ。アンタは俺に依頼したって、意味わかってんのか？」

お前は殺される側の人間なのだ、陽人はナイフの側面をチラつかせる。

鈍い光を放つ磨かれた切っ先がもう一度斉藤に向けられた。

「君のことなら、わかる」

「何のことだよ」

「ジョーカー、君は、黒谷陽人くんだね？」

「！」

陽人が驚いて目を見開く。

「アンタ、一体」

「必要なものは、存在するんだよ。だからそんなに不思議がることはない」

斉藤はふう、と息を吐いた。

「黒谷くん、私は賭けをしたんだよ。ジョーカーと言う名の、死神にね」

斉藤は話すことはこれでおわりだ、というような仕草を試みせた。

陽人は戸惑いを隠しきれないでいる。目の前の男をどうしたものか、と見つめなおした。

「君は、私にとんでもない無駄遣いをさせるつもりなのかい？」

すつと、陽人の目が冷たい色に変わった。先ほどまでの迷いが消えたその顔は、

殺人者と呼ぶにふさわしいものだ。

斉藤はゆっくりと目を閉じた。

「さようなら、ひなた」

いつの間にか降り始めた雪がうっすらと地面を覆い始めている。路地裏で、白い地面が赤く溶け出し出していた。

「ちくしょう、」

陽人は目の前のコンクリートの壁を蹴りつけた。

「お疲れさん」

離れた場所で待機していた古賀が替えの上着を持ってやってきた。返り血を受けたジャケットをゴミ袋に突っ込む。

「悪い、俺、今日は帰るわ」

事務所には戻らないことを告げると、陽人はゴミ袋を抱えた。

「ちよつと気分が悪いんだ」

古賀はあえて何も聞かなかった。

「お疲れ」

ああ、と陽人は右手を上げる。

その手をポケットにまた戻した。中には、小さな箱が入っていた。

酷く甘い

翌日。目覚まし時計の次に耳障りな音をたてて陽人を叩き起こしたのは、マリーからの電話だった。

「おはよう、昨日はどうしたの？ なんだか調子が悪いみたいだって聞いたんだけど」

「いや、大丈夫……」

陽人は頭をがりがりと搔いた。調子を狂わされたというのは事実だ。あれから明け方近くまで眠ることが出来なかった。

おつかれさま、とマリーは言った。仕事のことを言っているのだろう。斉藤の言っていた通り、24日の昼過ぎにはもう入金済だったらしい。

「なんだか妙な話じゃない？」

「ああ、その……なんっていうかさ、依頼してきたんがそのオッサン本人だったんだよ」

「あら、そうなの」

マリーはそれだったらしいの、と言った。現に金は振り込まれたのだからそれでいいのだと。

「別に珍しいことでもないわ。金持ちの自殺願望者つてのもいるんじゃない？ 私たちには関係ないけどね」

陽人が思い出した、男の様子は、そうは見えなかったが。

「それよりさ、昨日アンタが居ないから寂しかったわよ。御馳走だつていっぱい余っちゃったし。アンタどうせロクなもの食べてないでしょうから、古賀に持たせてあるの。」

残り物でわるいんだけど」

「えーいいよ、そんな」

丁度その時、玄関のブザーが鳴った。

「おーい、陽人ー。調子はどーだあー？」

古賀の能天気な声が聞こえてくる。

「今日はゆつくり休みな。それじゃあ」

マリーの通話は一方的に切れた。陽人は再び頭を掻いた。

古賀が持ち出した料理はデカイ七面鳥の丸焼きと、これまたデカイ手付かずのホールケーキだった。

その他には発泡酒が数本、安物の赤ワインの残りもあった。

「……オイ平助、もうちょっと気の利いた持ち帰り方しろよ」

マリーも古賀も、甘いものが苦手だ。おそらく見てくれだけで置いておかれたものなのだろう。

少し崩れかかったクリームの上でサンタクロースの人形が、メリークリスマス！と書かれたメッセージプレートを抱えていた。

「今日ぐらい派手な飯にしよーぜ？ああ俺はいいの、昨日食ったから」

「わけわかんねえって、マジ」

古賀は発泡酒を開けている。もう陽は高いが、まだ何も口にしていなかった陽人は家の中に買い置きのお米がないのに気付いた。

ただケーキもチキンも、食べる気がしなかった。デカイ肉の塊を温めなおす術がこの家にはないのだ。

「あのさあ、昨日の話なんだけど」

「あー？」

「お前、なんかヘンだったなあって、気になってさ」

古賀は単にデリバリーの為だけにやってきたわけではないようだ。

陽人は古賀に、マリーには言わなかった斎藤のことを話した。指輪を結局は預かってきたことも。

「変わった奴がいるもんだね。普通殺し屋に息子を引き合わせたりなんかするか？」

「俺もそう思うけどね。妙なオッサンだったぜ」

小さな箱を開いてみた。中には紫色の石がはめ込まれた指輪がある。

彼は安物だ、と言っていたが、そうは見えなかった。じっと見つめていると不思議な気持ちになってくる。あの時、斉藤に見つめられた時に感じた、

心の中を見透かされるような感覚が甦った。

「なあ、」

古賀の声で陽人は我に返った。

「ソイツ、いったい何を見ちまったんだろっな」

「ああ、で、どう思う？」

古賀はなんだ？と言つような顔を向けた。

「コイツを息子とやらに渡しに行った方がいって思つか」

うーん、と一声唸り、古賀は陽人に言った。

「俺の意見としてはな、それは元々請け負っちゃあいけないモンなんだよ。俺らの仕事は殺してさいなら、そんだけ」

陽人はきまり悪そうに箱を手の平の上で転がした。

古賀は、斉藤の自宅は例の書類に載っていたから、調べたらすぐにわかると陽人に言った。

「で、お人よしの黒谷くんは、どのツラ下げてその子に会いに行くつもりなんだい？」

古賀は残りを一気に飲み干す。

「陽人の好きにやんな、俺は別に反対はしないよ」

古賀は行くんなら、場所を教えてやると言う。

礼を言つて、古賀を見送つた後、異様な光景のキッチンで陽人は発泡酒のプルタブに指を掛けた。

もやもやした気分が晴れない。

陽人は指輪の入った箱をポケットに突っ込んだ。

無性に腹が減ってきて、ホールのケーキに直接フォークを突っ込んだ。

切り出した塊を口にすると、甘酸っぱい苺と、クリームの砂糖と油脂の混じり合った味がした。

陽人も、たいして甘いものが好きなわけではない。甘ったるい匂いが鼻につく。

無心にスポンジを抉り出し、結局はその殆どを腹に収めた。その甘さが、自らの弱さと重なり、酷く気分が悪かった。

赤ジャケットのサンタクロース

斉藤の自宅近くにある公園に辿りついたときには、もう日が暮れかかっていた。

ベンチを見つけ、とりあえずそこで横になる。気分が悪いのだ。原因は分かりきっているが。

雪は降っていないが、何時もの赤いジャケット一枚では少し冷たさが身に沁みた。

楽な体勢を取りながら胃の不快感が収まるのを祈るような気持ちで堪える。

ふと、ひんやりとした感触に気付いて目を覚ました、陽人は額に当てられたものが濡れたハンカチだというのに気付く。

起き上がると、ベンチの前には一人の女の子がじつと陽人を見つめていた。

「大丈夫？」

その子は陽人が起きたことに気付くと、ベンチの前にしゃがみ込んでそう言った。女の子にしては少し低めのハスキーボイスだ。

起き上がった際に額から外れて落ちたハンカチを拾うと、近くの水道で濡らし、女の子は再び陽人の額に当てた。

「おじさん、気分悪い？」

「大丈夫……うん、多分。ありがとう」

少しだけ楽にはなったのだが、まだそこを動きたくない気分だった。

「気持ち悪いのは、我慢してもよくなるらない。吐けばうんと楽になるよ」

「いや、わかってんだけどさ、その」

「大丈夫だよ、背中さすったげる。ほら」

女の子が指差すのは近くにある公衆トイレだ。腕を引かれるまま

立ち上がると陽人は女の子に先導される格好で歩きだした。行先は勿論男性用のそれだ。陽人は慌てて女の子を止めた。振り返った女の子は不思議そうな顔を向けた。

「今、使う人いない」

「って、そういうことじゃなくって、おじさんなら大丈夫だから！」

陽人は脳が嘔吐へのスイッチを入れたのを感じた。慌てて個室のドアを開けると、ほぼそれと同時に胃の中のを吐き出した。

ドアを閉める余裕がなかったので、女の子が心配そうについて入ってきた。

「頑張れ」

女の子は陽人の傍らにしゃがみ込み、その声を掛ける。

背中をさすられながら、陽人は自分でも情けなさ過ぎて泣けてきた。男性用トイレで涙と嘔吐物でぐちゃぐちゃのおっさんを一人の少女が介抱している、

誰かが見たとしたらさぞかし奇妙な光景に映ったことだろう。

何やってんだろう、俺。陽人は心の中でそう呟いた。

用を足し終え、ベンチに戻って一息つくくと、女の子が陽人にペットボトルの水を差し出した。

よく冷えた水が気持ちよかった。

改めて見た、女の子はとても可愛らしい顔立ちをしていた。

腰まで届く長い髪は薄茶色でふわふわしたウェーブを描き、前髪は眉の辺りで切り揃えられている。

まだ中学生くらいの子どものものだろう。スカートの裾から伸びた足が棒切れのようにほっそりとしていた。

この子にとんでもない面倒をかけたことに、陽人はそのワンピースを自分は汚しやしていないかと気が気ではなかった。

「まだ、調子悪そう？」

女の子が心配そうな声を掛けた。

「いや、もう大丈夫。それよりほんつとにごめんな！助かったよ。」

ありがとう」

「おじさん、お酒飲み過ぎたの？」

「いや、その……ケーキ食い過ぎて」

「ヘンなの」

「クリスマスだつってさあ、ホールで貰っても食いきれねえよな」

「クリスマス、」

女の子の表情が少しだけ曇ったようにみえた。

「君には、サンタさんは来なかったのかい？」

「……来なかった」

「そっか、ごめんな」

「おじさん、もしかしてサンタクロースなのか？」

「え？」

女の子はくす、と笑う。陽人のジャケットを掴んだ。

「赤い服着てるし、ヒゲ生えてるし、それになんか疲れてるみたい

だから」

「……あれはもっとじいさんだろ」

陽人は女の子につられて笑った。

「冗談だよ」

プレゼント、そう言われてみればそうだ。たしかに特徴は捉えて
いるが、自分はそんないいものではない。

陽人はポケットの中、あの小さな箱のことを思い出した。

ひとりぼっち2人

冬の日が暮れるのが早く、陽人は女の子が一人でこんな遅くまで出歩いているのが気になった。

斉藤の暮らしていたここ橙花町は内陸部にあり、そこそこ治安は良い。

ならず者のはきだめと称された向壁町とは事情が違うだろうが、この近くではつい先日殺人事件が起きたばかりである。

もともとそれは陽人の仕業に他ならなかったが。

「もう、家に帰らなくていいのか？」

「……うん、」

陽人がその声を掛けると、女の子は何か言い淀んだ風に答えた。

「君みたいにカワイイ子がこんな遅くまで外に居ちゃ危ないよ」

「おじさんこそ家帰んなくていいの？」

女の子は俯いていた顔を陽人に向けた。

陽人はポケットの中、箱をぎゅうと握りこんだ。

「俺はちよつと人に用があつて来たんだ、この辺りに住んでるって聞いたんだけど」

「おじさんはこの人じゃないんだ？どっから来たの？」

「あー、うん、まあ。君は？この近くの子？」

「うん」

「橙花第一、ってマンションはこの近くにあるかい？」

女の子ははつとした顔で立ち上がる。少し離れた場所に見える、背の低い建物を指差した。

「あっち」

「ああ、あれかあ。わかった。ありがとうな」

陽人が立ち上がると、女の子はその正面に回り込んで見上げてきた。

二人の身長差は優一つ分以上はある。

「あのマンションに、用があるの？」

「ああ、斉藤、つて人。そうだ、君の友達に斉藤ひな太つて子はい
る？」

「……友達、いない」

「あ、ああ、ごめん。俺その子に用があつて来たんだよ」

余計なことを言つてしまったと、陽人は慌てて取り繕つた。女の
子は暗い表情で俯いた顔を再び上げると、

陽人のジャケットの端を掴んで、ぐいと引っ張つた。

「案内したげる」

「え、いいつて、もうこんな時間だから」

「このあたり、道が結構入り組んでる。暗いと迷いやすいよ」
そういつて半ば強引に押し切られ、二人は公園を後にした。

建物は見えるのだがそれに続く道は分かりづらく、地元住民でな
ければ確かに行きつくのに苦労するかもしれない。

陽人は前を歩く女の子のことが気になって仕方がなかった。

用事と言えばこの形見の指輪を届けるだけだ。直ぐに終わるだろ
うし、そしたらこの子を家まで送つてやろう。

ぼんやりそんなことを考えていると女の子が振り返り、ちゃんと
ついてきているのか確認してまた前を向いた。

「ここだよ」

ごく一般的な作りの、少し古めかしい建物の前で女の子が立ち止
まった。よく見えないが、橙花第一、とマンションの側面に書かれ
ているのが見えた。

「いや、助かったよ」

カンカン、と靴音が高く響き渡る。3階までの階段を上がると一
番端の部屋、そこには確かに斉藤正幸、との表示があった。

「上がった」

女の子はポケットの中からキーホルダーを取り出す。慣れた手つ
きで鍵を開け、がちゃん、と音をたててドアが開いた。

「え、こころって、」

「うん」

振り返った女の子が陽人を正面から見上げた。

俄かに信じがたいのだが、

「じゃあ、君が……」

「おじさん、ヒナに何の用なの？」

息子の名前はひなたと言った。そして確かにヒナと名乗った、だが目の前にいるのは何処から見ても完全に女の子だった。

「どしたの？」

「いや、……びつくりした。息子さんだって聞いてたから」

ひなたはそういった反応には慣れていくらしく、まあね、と答える。

戸惑うのを隠しきれないのは陽人の方だった。

「上がつてよ。狭いし、ちょっと汚いけど」

「……邪魔します」

ひなたはリビングに陽人を案内した。中は父子家庭の二人暮らしには不自由しない程度の、こじんまりした作りだった。

二人が家についてからしばらくたって、玄関のチャイムが鳴った。ひなたがちょっとまって、とドアに駆け寄る。

ドアスコープから覗き込むと二人組の男が立っていた。

「斉藤さん、今晚は。警察の者だけど、ちょっと話を聞かせてもらえるかな？」

「……」

「いや、ごめんね。すぐ終わるから」

警察官だという二人組は手帳を見せ、ひなたはドアを少し開いた状態で対応した。

陽人の居る場所からそのやりとりははっきりと聞こえなかったが、彼らはなにやら手短に質問し、それにひなたがぼそぼそと答える。

「ごめんね、夜遅くに。ちゃんと戸締りして、なにかあったらすぐ

に行くからね」

二人組は帰って行った。ふう、と大きく息を吐き、ひな太がリビングに戻ってきた。

陽人は職業柄、警察とは仲良くなれない。正直随分肝が冷えたが、関わりがない風を装っていた。

「どうした、警察がくるなんて」

「うん、ちよつとね。……どしたの？おじさん、警察怖い？」

「そうじゃないよ」

ひな太はくす、と笑う。お茶持ってくる、とキッチンへと向かった。

その片隅に、手付かずのままの料理が放置されているのが見えた。

「……ああ、」

陽人は思わず声を漏らした。

テーブルにコーヒーの入ったカップが差し出される。

「事情はよくわからないんだけど。俺は、これを君に渡してほしいって頼まれたんだ」

陽人はひな太に箱をそつと手渡した。

「ついこの間、君のお父さんに。知り合い、とかでもないんだ。中身、確かめてみて」

陽人は自分でも反吐が出そうだな、と思いながら、白々しい台詞を吐いた。

ひな太がそつと箱を開く。中にはあの、紫色をした石の指輪が入っている。

それを見たひな太が泣きそうな表情に変わった。

「君の、お父さん、」

ひな太が陽人を見上げた。

「ヒナの父さん、死んじゃった」

ひな太の目から、涙がぽと、と零れ落ちる。

そのまま勢いで陽人のシャツに顔を埋め、声を上げずにしゃくりあげた。

陽人がその背中をそうつと撫でる。

ふと、思い出した。

『……ああ、自分とこの子は似ている』

陽人はいつかのクリスマスMASの事を思い出し、いいや、と首を振った。

それはあんまり酷すぎやしないか。

不思議な力

吉田寧々とは学生時代からの付き合いで、陽人にとって数少ない友人の一人だった。

生まれつき体が弱く、そのせいで少しだけ年上の同級だ。

寧々の病気は原因不明のもので、もうずっと入退院を繰り返している。

陽人は寧々を見舞う際、よく好きだと言っていた赤い花を持って行った。白い病室で、赤色は映えた。

「っーか俺、これがなんつていう名前なんかも知らねえんだけど」
陽人がそう言うと、寧々は笑った。

寧々は大量に色々な種類の薬を処方されていた。病気の一つもしたことのない陽人にはただ、訳が分からず見つめるだけだ。腹がいつぱいになりそうだった。

ある日のこと、寧々は今度手術を受けることになったのだ、と陽人に告げた。

「そっか……俺、仕事でさ、しばらく来らんないかもしれない」

「うん、ありがとう。お互い頑張ろうね」

寧々は窓の外、雪の降る暗い空を見つめていた。

「ねえ、陽人」

「ん？」

「なんかね、陽人と居るとき、なんか安心するんだ。……昔、元気だった頃みたいに大っきい青空の下で見上げてるような気分になる」

「なんだよ、ソレ」

「陽人が居てよかったなあ、って言ってんだよ」

寧々は何時ものようににっこりと微笑んで言う。なんだか気恥ずかしくて陽人は頭を掻いた。

その日はクリスマスイブだった。

暫くたって、陽人が病室を訪れた時、中には誰も居なかった。看護師に尋ねてみても、誰もそのことには答えてくれない。ここに寧々が居たことがまるで嘘だったかのようにその存在が影も形も無くなっていた。もやもやした気持ちが続くことがないまま、陽人は病院を後にした。

右手の赤い花束だけがやけにその存在を主張していた。

陽人がぼんやり昔のことを思い出しているうちにひなたは泣き止んだようだ。つた。

そうつとその髪を撫でてやる。

「落ち着いたか？」

「……うん」

鼻声でひなたは答えた。

「もうこんな時間だし、俺は帰るよ」

陽人のシャツをぎゅう、とひなたがつかんでいる。

「ヒナは、一人はイヤだ。怖い」

「……さつき会ったばかりの知らないオッサンが家にいる方が怖くねえのかよ」

「……怖い」

陽人はため息を吐いた。

「じゃあどうすんだ」

二人は暖房のついていない冷たいリビングで座り込んでいた。陽人の胸にまた、ひなたが顔を埋める。

陽人はすっかり困り果てていた。目の前の、見た目は可愛い少年は女のような少年は知らない人が居るのは怖いけど、帰らないでほしいというのだ。一人になるのも怖いから。

「お前、友達とかいないの？」

ひな太が首を振る。

「他に親戚とか、頼れる人とか」

さつきよりも強く首を横に振った。陽人は再び深いため息を吐いた。

「お前、俺が泥棒とかだったりしたらどうすんだよ？」

「……うち、ビンボーだもん」

「そーゆー問題じゃないって、だいたいお前、ほんとに男かよ？つかぜんっぜん信じらんねえんだけど」

ひな太は顔を上げた。目が合うと、やはりそうそうお目にはかからない位の美少女に見える。

すつくと立ち上がったひな太は、陽人の目の前で着ていたワンピースを捲り上げた。

サーモンピンクのスカートの下には女性用の下着を身に着けている。ただその中には、自分と同じ器官が存在しているらしいのが見取れた。

「……なに、その勝ち誇ったみたいな顔」

これでいいか、と言ったような顔をして、ひな太がぱさ、と裾を離す。

「おじさんの名前、なんていうんだ？」

「あ、俺？俺は、陽人。黒谷陽人っていうんだけど」

「はるひと、」

ひな太は確認するように口に出した。

陽人自身も、ひな太を一人にしておくのは不安だった。だがしかし、この場で一番この子の傍に居るべきではない人物は何を隠そう陽人本人なのだ。

「だから、もしなんだったらさつきの警察の人にでも、」

言いかけてふと、なにか思い出した。陽人はテーブルの上、あの小さな箱を持ち出した。

そっと開いてみる。見てみると何だか不思議な気持ちになってくる。陽人はひな太にもそれが伝わると考えたのだ。

「お父さん」

ひなたはその石を見ると、ようやく穏やかな表情を浮かべた。

「もう、大丈夫だよな？」

「うん、……ごめんなさい」

ひなたは遅くまで引き留めてしまったことを詫びた。陽人が頭をぼんぼん、と軽く抑える。

「陽人は、知らないオッサンじゃないよ。名前知ってるもん」

「ああ」

カチ、とひなたが鍵を掛けたのを確認して、陽人は階段を駆け下りた。

しばらく歩いてから振り返って、その部屋を見上げた。

そのカーテンが開いて、ひなたが陽人に向かって手を振った。それに軽く手を上げて答えると、再び暗い夜道を歩き出した。

猫の言ひごと

陽人が猫缶を開けると、事務所内に居る猫たちが一斉に集まってきた。

全部で6匹、皆夢中で皿に顔を突っ込んでいる。陽人は屈みこんでその中の一匹に声を掛けた。

「なあ、うまいか、コレ」

窓際では平助が、退屈そうに伸びをしている。

「今年ももう終わりかあ」

「そーいや、古賀の親父さんどーしてんの？」

「ああ、元気なんじゃねえの？この前電話あったよ。今度陽人も連れて、店に遊びにこいってさ」

「そっか」

陽人の両親は遠い昔に亡くなっており、平助のそういったやりとりは羨ましいような、よくわからないような感覚だった。

腹が一杯になったと見える猫が陽人にすり寄ってきた。そっと抱き上げる。白い毛並みに金色の目をした猫だ。

何かややこしい名前が付けられていた気がする。

ガチャ、と隣の部屋のドアが開いて、マリーがやってきた。手には資料らしき紙の束がある。

猫たちはまた一斉にマリーの元へと駆け寄り、陽人の腕の中の猫は思いつきり爪を立てて飛び降りた。

「痛って！」

マリーはお待ちどうさま、と言うと机の上にはさっと紙の束を広げた。

「まーた仕事かいマリー」

「古賀、アンタ今月一軒も新規の開拓出来てないわよね？」

平助は誤魔化すようにへらへら笑うとバツが悪そうに頭を掻いた。「まあこっちはいいの。その分ジョーカー様に頑張ってもら

わなきゃ」

「ウチは年中無休だねえ」

平助が資料の山を見ながら言った。とす、とその上に猫が飛び乗る。その猫をマリーはそつと抱き上げた。

「客の方が無休なんだろ、忙しいこつて」

マリーは順番に、とりあえず受けた依頼内容を読み上げた。実際に請け負うかどうかはこれから決めるのだ。

「浮気相手の女の顔を二目と見られない様にしてほしいんだってさ」
「……そーゆーキモイのはナシだ、他には」

却下した件を床に投げ、また新しい紙を手取る。

「こつというのはどう？小野田正造、54歳。ある組織のヤクを盗み持ってる。コイツから取り戻してほしい。殺しても構わない」

「おっかないね」

「つーか俺は泥棒じゃねえぞ」

陽人は人知れず住居に侵入したり、物を盗むなどといった技術は持っていない。噂が先走りして、何でも屋のように思われている所があるようだ。

平助が男の資料に目を通した。男の所属する会社の名前は水無月製薬といった。確か一年ほど前に移転して、旧施設が謎の爆発事故を起こした所だ。

「受けておく意味あるんじゃない？」

「俺は専門外だつて」

「そーゆうことなら任せてよ、どーも手癖が悪いもんで」

平助は眼鏡を押し上げると、どこか楽しげな笑みを浮かべた。

マリーはその他の依頼にざつと目を通し、その内容にうんざりした顔を向けた。

「あーイヤだイヤだ。人間の男なんてロクな奴がいないわ」

「つて何言つてんだよマリー。そんなこと言つてつと、将来寂しい目にあうぜ？」

マリーが腕の中の猫をぎゅう、と抱きしめた。

「アタシは猫の言うこと以外信用しないの。薄汚い人間の男なんて真つ平ごめんだわ」

「おーい、マリー」

陽人と平助がお互い顔を見合わせているのを見ると、マリーは笑った。

「アンタたちは別よ？だってアタシが拾った野良猫ちゃんだもの」
マリーの腕の中の猫が二人に向かってにゃあ、と鳴いた。

明けて27日の夜。小野田の屋敷内の資料に目を通し、大体のことを把握したらしい平助は

音の立たないようにガラスを割って中に侵入した。いやに慣れた手つきだ。陽人は感心していいのか悪いのか、振り返った平助に小声で呟く。

「なあ平助、お前何やってたヒトなんだよ」

「さあねー、まあソレは企業秘密ってことで」

男の自室内に入ると、そこには金庫があった。あるとすればこの中に違いないと、平助が正面のダイヤル式のロックを見つめる。

その時、ばたん、とドアが開いた。小野田だ。

「そこにいるのは誰だ！」

男がそれ以上大声を上げるのを、ハンドタオルを押し付けて制し、陽人は拘束したまま開いたドアを足で押し戻した。

ばたん、と静かにドアが閉まる。

「アンタ、小野田正造だな？死にたくなけりや大人しくしてな」

もごもごとなにか言いたそうにしていた男は陽人の手にしたナイフを見て、観念したようだった。

騒いだりしないことを約束させると、口元のタオルを外す。代わりに、と背中にナイフの側面を押し当てた。

「なあ、アンタが流してるってヤクはこん中にはねえの？」

平助が金庫の中を漁った後で、札束をポケットの中にねじ込んで

いる。他にめぼしいものは見つからなかったようだ。

「何のことだ、お前たちは一体」

「アンタが盗んだモンを取り戻してくれって依頼されてんだよ。なんか心当たりねえのかよ」

陽人を振り返り、小野田は必至の形相を向けた。

「俺は何も知らないんだ」

少し声が大きかったので、陽人はぎゅうと掴んだ腕を捻りあげた。ひい、と小さく呻いて小野田は身を擦った。

「……ハメられたんだ、俺は本当に何も知らない」

「知ってることがあるんなら、素直に話した方が身の為だぜ？」

小野田は混乱した頭で必至に思いを巡らせているようだだった。

「探し物が何なのかは知らないが、ウチの取り扱う商品なら、あの管理室に入れたのは自分だけじゃない。」

確かに新薬の開発に関わっていたのは事実だが、俺は手を出してない。本当に知らないんだ」

陽人が平助を見る。平助は腕組みをして少し考えて、しわしわの顔をした小野田を見た。

「オツケー、まあいいんじゃない？」

陽人はレコーダーを停止させた。

「物は見つかんかったけどさ、これで先方も納得してくれるだろ」

陽人が手を離すと、小野田はその場に崩れ落ちるように座り込んだ。平助がその正面に立つ。

しやがみ込んで目を合わせた。

「ひとつ聞きたいんだけど。アンタの会社の得意先に金井沢病院はあるかい？」

小野田は声が出せずに何度も首を縦に振った。

「そっか、」

陽人は外の様子を見た。しん、と静まり返っている。住宅街はもう眠りについているようだ。

放心した小野田が腰を抜かしたままその場で僅かに身を擦らせてい

る。

「コイツ、どうする？」

陽人が小野田を見下ろした。その目の冷たい色に、小野田が震え上がった。

「お願いだ、通報はしないから、命は」

「そうだな」

陽人は再び拾い上げたハンドタオルに液体をしみこませ、刺激臭のある薬品を小野田に押し付ける。

そして正面の急所目がけて手にしたナイフを突き立てた。

何度か角度を変えて差し込む。鈍い手ごたえがあった。

どき、と小野田の体が意思を失って倒れる。返り血が頬を伝った。

「俺も信用してねーや」

つながり

午前二時を少し過ぎた辺りの、人気のない夜道を歩いていた。途中コンビニで買ったパンを齧りながら、平助は隣の陽人を見て言った。「どう思う?」

「何がだよ」

「今回の件についてさ。俺らは依頼主についてはノータッチだけどさ、俺の予想じゃたぶん”ミナヅキ”の連中だよ」

「ミナヅキ?」

「小野田の勤めてたときさ。水無月製菓。あそこにや妙なウワサが絶えねえってオヤジが言ってた」

古賀の父親は特殊な客層を持つ小さなバーを営んでいる。そういつた関係で、ちよつとした情報屋の顔も持っていた。

「今度マジでオヤジに会いに行った方がいいかもな」

陽人は煙草に火を点けた。ふう、と白く曇った息を吐き出す。

「平助、お前なんでそんなにミナヅキに拘ってんだよ」

「わかんねえ?」

平助は語尾を上げて言う。

「小野田も言ってたろ?ミナヅキは金井沢病院にも関わってる。俺

はそのつながりになにかを感じるわけさ。こーみえてもさあ、俺は、いつだってお前の為になりてえなあって思ってたんだよ」

「キモイこと言うなって」

「はは、寧々のことが何かわかればいいねえ」

「……まあな」

ひゆう、と時折冷たい風が吹き抜けた。疎らな街灯が照らす中、二人は家路を急いでいる。

「……俺がジョーカーだって、誰も知らねえはずだよなあ」

「まあ、そーじゃねえの?どしたんだよ」

「いや、なんでもねえ。つーか平助、あんまちよーしに乗って危ね

え真似はすんなよ」

「へいへい」

目の前で道は二股に分かれている。ここまででそれぞれ、違う道を歩くことになる。

「じゃあな」

「ああ。つつかれたー、もう今からでもちつと寝るわ」

陽人は大きく伸びをした。手を振る、平助の指に銀色の指輪が光っている。

それを見て、ふつとひなたのことを思い出した。

陽人は自室で、疲れ切った体をベッドに横たえた。手にはまだ、小野田を刺した感触が残っている。

もう、慣れっこになってしまった。

目を瞑れば、それでも体は眠りに落ちていった。

目を覚ましたのはもう昼過ぎになってからだだった。

やばい、そう飛び起きてはみたものの、今日は特に仕事が入っていないわけではない。

それほど文句も言われないだろうと、とりあえず起きて身支度をする。

少し、思うところがあつて陽人はバスに乗り込んだ。行先は、橙花団地前の児童公園だ。

2組の子ども連れの親子が帰つてからは誰も居なくなつた小さな公園で、陽人はベンチに座っていた。

視線の先には、橙花第一、とかかれたマンションがある。

「陽人！」

急に自分を呼ぶ声が聞こえて、陽人はその方向を見た。黒いミニスカートに、髪をツインテールに結んだ女の子が駆け寄ってくる。

「ひなた？」

ひなたはベンチの前まで来て、陽人を見てにっこりと微笑んだ。

「陽人、どしたの？」

「いや、あのさあ……ヒナのことを気になって」

咄嗟に上手いことが言えず、陽人は自分でもどうしてそうしたのかわからないまま、とりあえずの本音を口にした。

ひな太は少し照れくさそうにしている。ありがとう、と小声で呟いた。

ひな太は首から例の指輪をぶら下げていた。

「うん、これね、ヒナの指には合わないから」

「そっか」

ひな太は陽人の隣に座った。

「陽人、今日は休み？」

「ああ、まあ休みみてえなもんかな」

「あのさ、陽人。今日、夕ご飯、ウチに食べに来ない？」

突然の誘いに陽人は驚いてひな太を見た。あれから、ひな太は一人であの家に居るのだ。

「ヒナ、なんでも作れるよ。陽人の好きなものなんでも言って」

「すげえなあ、ヒナは。家んことはやってたんか」

「うん。でもヒナ、一人分のごはんの量、よくわかんないんだ」

そういうと、ひな太は少しだけ寂しそうな表情を浮かべて、俯いた。陽人はその頭をそうつと撫でた。

ひな太が潤んだ目で見上げている。

「うん、俺はさ、ヒナの友達なんだよな？……今日はちょっと会社に顔出すからさ、また改めて連絡するよ。」

「そうだ。俺のケータイ、番号教えるから」

ひな太は携帯電話を持っていないらしく、教えた番号は手帳に書きこんでいた。

その様子は年相応の子どもらしく見えて、陽人はふつと微笑んだ。

「ヒナ、一人で寂しくねえのか」

「うん、……お母さんのお婆ちゃんが、年明けからヒナのこと引き取ってくれるんだって。そしたらここともお別れなんだ……ずっと、

ずっと遠くだから」

「そっか」

じゃあ、後でね。そう言うと、ひなたは帰って行った。一人残されて、陽人はポケットから煙草を取り出す。

「……まいったな」

ふう、とため息とともに白い息を吐き出した。

4階の事務所に着いたのは終業間近で、いい加減遅刻し過ぎなことにマリーから一通りの愚痴を言われた後、陽人は猫たちのねぐらの掃除と餌やりをするようにとの指示を受けた。

定時を過ぎて帰り支度を始めた頃、携帯が鳴った。

画面の表示は見知らぬ番号だ。思い当たるところがあつて、陽人は通話ボタンを押した。

「……」

電話の主は、何も答えない。

「……ヒナ？」

陽人はそう呼びかけてみた。息を飲むような声が聞こえた。それからまた、しばらく沈黙があつた。

「ヒナ、いったいどうしたんだ？」

「……たすけて、」

それはたしかにひなたの声だった。陽人は一方的に切れた携帯を掴むと、橙花団地前行きのバスに乗り込んだ。

息を切らして階段を駆け上がる。斉藤、と書かれたドアの前まで来た。

インターホンを鳴らしても反応がない。ドアノブを回すと、がちゃり、とドアが開いた。

「ヒナ……」

玄関先に、血を流した男が倒れている。視線を上げると、ひな太が血に塗れた包丁を握りしめて座り込んでいた。

南風会

ひなたは玄関先に座り込んで、倒れている男をぼんやりした目で見つめていた。顔色が悪く、真っ白になっている。

包丁を握りしめたままの右手が震えていた。

「ヒナ、」

陽人の呼びかけに、ひなたが顔を上げる。

ひなたの腕は血に塗れていたが、どうやらそれは倒れている男からのもので、ひなたに怪我はなかった。

そっと近づくと、その硬直した指を解してやる。からん、と包丁がその場に転がった。

「大丈夫、もう心配ない」

陽人はぎゅう、とひなたを抱きしめた。ひなたはそこで緊張の糸が切れたように、声を上げて泣き始めた。

ひなたの背中をさすってやりながら、陽人はちら、と仰向けに倒れている男の様子を伺った。腹部から出血しているようだが、

見たところそれほど深い傷ではなさそうだ。致命傷、というには弱い。

おそらくだが、切り付けられたショックでどこか頭でもぶつけて、脳震盪を起こしているのだろう。

陽人はぼんぼん、と軽く背中を叩くと、体を離してひなたを見つめた。

「落ち着いた？」

ひなたはうん、と頷いて答えた。

「何があったのか、話せるか」

「……さつき。ご飯の用意したら、後ろからこの人がヒナのこと押さえつけてきたんだ。ヒナびつくりして、包丁持ったまま逃げようとして、そしたらざく、って。」

この人よろけてそこで頭打って、動かなくなった」

「どっから入って来たんだ？ 玄関は開いてた？」

「奥の部屋、多分、窓閉めるの忘れてたんだと思う」

陽人は男に近寄ると、シャツをはだけさせた。露わになった傷口はもう乾き始めている。息があつた。

「……ねえ、その人、死んじゃつたの？」

「大丈夫だよ、生きてる。気絶してるだけみてえだ」

「……良かった」

ひなたの目から、また一筋涙が零れて落ちた。

陽人は男の左胸に、見覚えのあるバッジを見つけた。特徴のある銀色の細かな細工が施されたものだ。

「コイツは……」

「……どうしたの？」

「なあ、ヒナ。このこと、警察には電話したのか？」

「ううん、まだ」

ひなたは首を振った。この部屋は棟の一番端にある。陽人は隣の部屋の方を見た。

「隣には、誰か住んでるかい？」

「ううん、誰も居ない」

「そっか」

陽人はふう、と一度大きく息を吐いた。そして再びひなたの傍に寄ると、その両肩を抱えた。

「なあヒナ、このことは、俺に任せてくれねえか。誰にも言わないで、俺が全部カタ付ける」

「陽人？」

「お前を怖い目には合わせねえって約束すつから。俺のこと、信じてもらっていい？」

ひなたは陽人をじつと見つめた。どうしたものかと少し戸惑った様子だったが、やがて頷いた。

「……ありがとう。そうだ、一応コイツの手当とかしとかねえと。」

ヒナ、救急箱貸してくれねえか」

「わかった」

「あー、あとなんか、手足を縛るヒモみてえなのもあると助かる」
「え？」

ひな太が奥の部屋に消えたのを見届けると、陽人は携帯電話を取り出した。

何度かのコール音のあと、聴き慣れた声が耳元に届く。

それから数十分後。一台の車が、マンションの前に到着した。
インターホンが鳴らされる。ドアを開けると、そこには二人の強面の男が立っていた。

「久し振り」

男たちの後ろから、小柄な女性が姿を現した。髪をひとまとめに高く結い上げた和服姿で、その年齢に不釣り合いな雰囲気醸し出している。

「久し振りね陽人、元気そうだなにより」

ずっと中に入り込んできた二人組の男が、まだ目を覚まさない男を抱えてどこかへと連れ去った。

「立ち話もなんだが、あいにくひとんちなんで」

「いいわよここで。それより、ありがとう」

「礼には及ばねえよ。それより桃、南風会で間違いないか」

「ええ」

桃、と呼ばれた女性が頷く。陽人は忌々しげな表情を浮かべた。

「静かなものね、全然騒ぎにはなっていないみたい。でもここ、しばらく離れた方がいいわよ。なんだったら加藤と西村の二人にでも張らせるけど」

いつの間にか戻ってきていた二人組が桃の両隣に立っていた。

「わかってる」

陽人は視界の端に捉えた包丁を、そっと拾い上げた。

「にしても、ヒナみてえなガキを襲いやがって、大の男が落ちたも

んだぜ。ここは俺らみてえなモンとはなんの関わりもねえってのに」
「アイツらだつて、そこまで無節操なわけじゃないと思う。なにかわからないけど、理由があつて狙われたのには間違いない。アンタは何か心当たりとかないの？」

「心当たりか……まあ、あるっちゃああるけどさ。南風とは多分繋がんねえな」

陽人は、斉藤が死ぬ前に『自分はいずれ殺される』と告げたことを思い出した。

偶然どうにかなつたものの、ひな太まで何者かの手が及んだことは事実だ。斉藤の死は無駄だったのかと、陽人はぐ、と拳を握りこむ。もう一度頭を整理してみた。斉藤の勤め先は金井沢病院だった。

そこで何かを知つたというのなら、平助の言葉を借りるなら妙なつながりがあるはずだ。

重い空気に桃はふう、と息を吐き出す。

「そう。」ミナヅキ”のバックに、南風会がついてるって話、聞いたことはある？」

”ミナヅキ”は斉藤の一件以来、ずっと陽人に付きまとう名前だった。

「ああ」

「あそこも妙な事故が起きたばっかだし。南風会も、若頭の工藤圭吾が行方知れずになつてからは大人しかつたんだけど。最近また活発になつてきてるわ」

「そうかもなあ。でもさ、真山と南風がやりあつてると噂は聞かねえんだけど」

「ウチのこととか関係ないの。あたしが個人的に叩き潰したいだけだもん」

桃はにっこりと笑いながら物騒な台詞を吐いた。

「おつかねえなあ。なあ、女ってみんなそんななんか」

「さあね。それにしても、生け捕りは初めてじゃない？これから色々忙しくなりそう。アンタのここにもなにか手伝ってもらうかもね」

「そうしてくれると助かる。仕事がねえって、マリーがうつせえんだよ」

桃はマリーのそんな様子を思い浮かべると、くす、と笑った。

陽人と桃とはそれなりに長い付き合いだが、桃が南風会に拘る理由まで知らなかった。

必要なときは協力しあうも、互いの余計な詮索をしないことが上手く付き合っていくためのコツでもある。

「それじゃあ。また、なにかあつたら連絡して頂戴」

「ああ」

桃が帰ってから、陽人は玄関周りの血痕を拭き取る。包丁を、台所に戻しておいた。

「陽人、」

「ああ、もういいのか」

「うん」

ひなたは持つて行きたいモノを詰め込んだバッグを手に、陽人を見上げている。

ひなたは年明けには県外に越す予定だ。あと数日、陽人は自分の家にひなたを匿うことにした。

南風会の目的は知らないが、今のところ陽人との繋がりは把握されてはいないだろうと思っただからだ。

「寒いから、あつたかい恰好しとけよ。まあ、ここより狭くて、汚ねえ部屋で悪いんだけど」

ひなたがぎゅう、と陽人の腕にしがみついた。その胸元で、紫色の石の指輪が揺れていた。

心が壊れそうなときは

陽人が暮らすのは、向壁町にほど近い場所にある。ひな太のマンションよりも古い単身者向けの部屋だ。

窓からは海が見える。一応の売りで、眺めはたいして良くなかったが。

ひな太は野球帽に髪の毛を隠し、とりあえず男の子に見えるような恰好をしていた。女の子に見える男の子が、男装をしているのだ。なんだかややこしい話ではある。

陽人は件の男が単独で動いたとは考えにくいこともあり、夜道をいつも以上に警戒しながら歩いた。

「海が近いの？」

ひな太がそう呟く。

「波の音が聞こえる」

「ああ」

陽人は腕時計を確認した。日付はもう29日に変わっていた。

部屋の中は冷えた空気で満たされている。陽人はヒーターのスイッチを入れたが、温まるには大分時間が掛かりそうだった。

ひな太が寒くないように、陽人は来ていたジャケットを背中に掛けてやった。

「ありがとう、でも陽人は、寒くないの？」

「俺は平気だから。それよかごめんな、えらそうに人呼べるような部屋じゃねえや」

陽人はそう言って笑ったが、ひな太はどこか考え込むような暗い顔をしていた。

やがてぼそりと呟く。

「ヒナ、迷惑かけた。ごめんなさい」

「なに言ってるんだよ。……あの、泥棒のことだったら、とりあえず

ヒナはもう心配しなくていいから」

「そうじゃない、そんなんじゃない……陽人は、どうしてヒナのこと助けてくれるの？」

ひなたは陽人をじっと見つめている。真剣な眼差しに、陽人もひなたに真面目な顔を向けた。

「俺が、ヒナを助けたいと思ったから。ヒナ、最初に俺のこと助けてくれただろ、いやそれだけじゃなくて」

陽人はそこで一旦言葉を区切った。向かい合うひなたの肩を両手で抱える。

「ヒナのこと、放って置けなくなっただよ。まだちいせえのに、守ってくれる親も居ねえなんてあんまりじゃねえか」

ひなたは陽人を見上げている。少しだけ笑顔を見せた。

「ありがとう」

「いいって。ヒナの方こそ、なんで俺なんかのこと助けてくれたんだよ」

「……ヒナね、おばあちゃんにも、学校の皆にも嫌われてる。皆、

ヒナのこと気持ち悪いって言うんだ。男なのに、ひらひらの服ばかり着てるから」

陽人はそう呟くひなたを見た。確かに男の子としてはどうか、と思うのだが。ひなたはフリルのついたワンピースも、腰まで伸ばした髪もとてもよく似合っていた。

「ヒナは、可愛いのかなあ」

「ありがとう。お父さんは、ヒナのやりたいようにさせてくれたの。ヒナ、友達居ないけど、お父さんが居て話ししてくれるから寂しくなかったよ。」

けど……お父さん、居なくなつた。ヒナ、一人ぼっちになつたって、気が付いた」

ひなたは眠気から覚めた目を陽人に向けた。再びあの、暗い表情をしている。

「あの時ね、一人で家に居るの辛かったから、ずっと公園に居たの。」

どうしたらいいか、わかんなくて。一人はイヤだけど友達、どうやって作るのかなあって考えてた。

ヒナね、初めて誰かに関わろうってしたの。そしたら陽人を見つけた」

陽人はひな太が、あの日そんな気持ちでいたことにまで思いが至らなかった自分を恥じた。ひな太から父親を奪っておいて、この子に面倒までかけたのだ。

謝るより先に、ひな太がにっこりと陽人に微笑みかけた。

「陽人が居なかったら、きつとまだどうしていいかわかんなくて一人で泣いてたよ。ありがとうね」

「ヒナ、……俺は、オッサンだけどき、ヒナの友達だから」

「うん、ヒナ、陽人の友達だよ」

「泣きてえ時は、泣きゃあいいんだ。辛いことがあるなら力になってやるから、なんでも言え」

「うん、ありがとう……あのね、あのね、ヒナ陽人にお願ひがある」「なんだ？」

ひな太はそつと伸ばした指を、陽人の額に当てた、とんとんと軽く叩いた後で、手の平を額に押し当てる。それから手を下し、そつと左胸に触れた。

「あのねえ、辛い時の、おまじないだよ。ヒナ、いまちよつとお父さん思い出して悲しい」

陽人は微笑んで頷くと、教えられたとおりひな太の額に手を当てた。ひな太がなんだかくすぐつたそうなの、恥ずかしそうな顔をしている。

「よくわかんないけど、これ、お父さんが教えてくれたの。誰かにやってもらわなきゃだめなんだよ。心が壊れそうな時の、おまじないなんだって」

ひな太はそう言って笑った。

犯罪者

夜が明ける少し前。陽人はひなたがまだ眠っているのを確認すると、静かに玄関のドアを閉めた。

歩いて数分程にあるコンビニで適当に食べるものを調達する。店を出て、ポケットに突っ込んだ携帯を取り出した。

「5時か」

まだ眠っているかもしれないな、と思いながら陽人は発信ボタンを押した。

何回かのコール音の後、寝起きの不機嫌そうに掠れた声が届いた。

「……どしたんだよこんな朝っぱらから」

「悪い平助。それがちよつとばかり困ったことになったんだ、年明けまで休めねえかな？……無理だよなあ」

「何言ってるんだよ、訳わかんねえから最初っから説明しろ」

「正直俺にもよくわかんねえんだけど。今、俺は家であの斉藤の息子を匿っている」

「……マジで何がどうなったんだよ。電話じゃわかんねえ、俺今からそっち行くわ」

「ああ、頼む」

通話を終え、陽人はふう、と大きく息を吐いた。

部屋に戻ると、ひなたがリビングで座り込んでいた。まだ起きたばかりらしく寝ぼけた顔をしている。

「ああ、ゴメン。食うモンなくってさ」

ひなたは瞼を擦ると、欠伸をした。どうやら放って置かれたとは思っていないらしい。

「陽人、おはよう」

「ああ、おはよう。よく眠れたか？」

ひなたは頷いた。陽人のベッドは一応及第点を頂けた様子だ。

ビニール袋からパンや牛乳を取り出していると、玄関でインターホ

ンが鳴った。びく、とひな太が体を強張らせる。

「陽人、俺だ、開けてくれよ」

「ああ、早ええな」

ドアが開くと、ひな太は慌ててリビングの隅に逃げ込んだ。狭い部屋は玄関からすぐに全体が見渡せる。平助はひな太を見、明らかに驚いた顔を陽人に向けた。

陽人がひな太の傍に寄ると、その陰に隠れるように身を隠し、ひな太は訪問者を見つめている。

「コイツは平助。俺の連れだから心配ねえよ。まあ、そんな悪い奴でもねえから」

「あのさーもうちょっとマシな紹介してくんない？」

言いながら平助は玄関から室内に上がりこんだ。ぐっと陽人のシヤツを掴む手に力が込められる。元々の人見知りする性分が出て、ひな太は警戒しているようだ。

平助はやや長めに前髪を残したショートカットで、年齢の割には若く見える顔立ちをしている。オレンジ色をしたセルフフレームの眼鏡を掛けていた。

その少々軽い言動と相まって、軽薄な男に見られがちだ。

平助は無精ひげを生やしたジャージ姿の三十男と、その陰に隠れてこちらを伺うツインテールの子どもを見て言った。

「っーか陽人。言っちゃあなんだが、思いつきり誘拐にしか見えん」

「……俺もそうは思う」

平助は身を屈めてひな太と目線を合わせた。

「はじめまして。それ、綺麗だね。何ていう石？」

首から下げた指輪を、ひな太はぎゅう、と手の中に握りこむ。

「やれやれ。お兄ちゃん怖いなじゃないよ」

陽人はひな太の背中をぽんぽん、と叩いた。

「ヒナ、俺は仕事行かなきゃなんねえんだ。一人でも怖くねえか？」

ひな太は陽人を見上げるとうん、と頷いた。

「ヒナ宿題やってるから、平気だよ」

「そんなモン置いてくりゃあいいのに」

平助が呆れた顔で笑っている。

「終わったら速攻で帰るから、またなんかあったら携帯鳴らせよ。そんなときや用事ぶっちって帰るから」

「うん。ありがとう」

ひなたに鍵とチェーンを掛けさせた後、陽人は事情を話しながら歩き出した。

「……と、まあ何というか、ヒナのこと狙った奴ってのが南風会のメンバーだったみたいでさ。そいつらの情報欲しがつてる真山んとこの姫さんが回収してたよ。」

まあ今頃どんなことになってつかは、考えたくもねーな」

「へえ、またややこしいことになったもんだね。だから言わんこっちゃない、関わんなつったろ」

「わかつてるって。こうなりゃ俺の気が済むようにやるよ。毒を食らわば皿までだろ」

「その子、お前が親父さんを殺したんだって知らねえんだよなあ、皮肉なもんだ」

「どうせ年明けには関係なくなんだ、バラすこたあねえだろ」

陽人はその点については、きまり悪そうに頭を掻いた。

「……でさ。あの子、マジで斉藤って奴の息子？」

「だよ」

「うっそ、てか何で言い切れるんさ。ありゃどっから見ても女の子だろ、それも超美少女」

「見たし」

「うわ変態」

「何だよ、俺もお前と同じこと言ったよ。したら向こうが証拠みせてきたんだよ」

「っーか、おたくら一体どういう関係な訳？」

「知らねーよ友達だろ。俺にもわかんねーよ」

「犯罪者や、犯罪者がある」

「何だよその口調」

日が昇り、気が付けば辺りはすっかり明るくなっていった。バス停の近くまで来て、二人はそこにあるベンチに座った。

「まあ、お前がそうしてやってんのは、しゃーねえ事情の元だつてのはわかつた」

平助は少し間をおいて、陽人をまじまじと見つめる。

「惚れたんだろ」

思いがけない一言に陽人は噎せた。

「やめるよ、それは完全にアウトだろ」

「冗談。まあマジな話、あれで女だったら俺なら一日10回は口説くわ」

陽人はふう、と息を吐いた。思い出したように煙草を探り、火を点ける。

ふつと、気にかかることがあった。

「なあ、平助。なんかこう不思議な力とやらがあつたとして、それでき、……いや、ゴメン。言つてて訳わかんなくなつた」

「なんだよ」

「あの、斉藤つてやつが、俺のことを知つてたんだ。黒谷陽人は、ジョーカーだと。そいつ、まるで頭ん中読んだみてえにさ。まあそれは俺の気のせいかもしれないけど、

……誰も知らねえ筈だしなあ」

「ちよつとまでよ、お前そーゆうことはもつと早く言えつて」

平助は思いついたことを脳内で整理している様子だった。彼は前々から、なにか不可解なものの存在を感じ取っている。

それは単に平助の個人的な問題ではなく、もつと大きく陽人やマリにも関わるような案件だ。そしてそれが多分、寧々とも。

ここ数日に立て続けに処理した”仕事”には、何か隠れた繋がりがあつたのだと平助は確信した。

「斉藤が金井沢の関係者で、小野田は水無月、息子を狙つた南風会と水無月は、裏で繋がつてる、か」

平助は急に立ち上がると、陽人に言った。

「俺、今から親父のとこ帰るわ。ちょっと聞きたいことがあるんだ。すぐ帰っけど、マリーにゃあ上手く言っというて」

「平助」

「ああ、俺もヒナに協力するようなもんかな。その斉藤ってやつ、ここまで含めてジョーカーに依頼してきたんじゃねえの?」

「必要なモンか、……だとしたら、すげえな」

平助はバス停を引き返し、自宅のある海沿いの町を目指した。

へい助

平助の実家は小さな飲食店を営んでいる。土地柄、一般的な客層とは異なり、訪れるのは訳ありの輩が多数を占めているような所だ。腕時計で今の時刻を確認する。その延長線上にはめられた銀の指輪を見て、平助は目を細めた。

重い木で出来た扉を開くと、軽快なジャズが聴こえてくる。店内には今の時刻、客の姿は見えなかった。

「いらつしゃい、……て、なんだ。平助じゃねえか」

顔を上げた店主、古賀雄司は平助を見て驚いた様子だったが、直に満面の笑みを浮かべた。

平助もつられて、はにかんだ様に笑う。

「ただいま」

平助が雄司の元に引き取られたのは、今から何十年も前のことだ。当時平助は6歳で、それ以前のことはあまりよく覚えていない。

頭の弱い母親と、手癖の悪い父親の間に生まれた。父親は定職に就かずふらふらと遊び歩いて、金が無くなると帰ってくるような男だった。

女手一つで子どもを育て、男に貢ぐための金を稼いでいた母は、平助が5歳になるころに体を壊してそのまま帰らぬ人となった。

母が亡くなると、父は息子に標的を変えた。彼は息子に盗みを覚えさせた。平助は必死でその辺の子役顔負けの、大人を騙す演技力も身に着けた。金や物を盗むのは日常茶飯事だった。

そうしなければ父から躰けと称した、時に性的なものを含めた折檻を受けるためである。

そんなことが続いたある日、平助はなんだか頭がぼうつとしていた。手にはごみの中から拾い出してきたバットが握られていた。こ

れで遊ぼうと思っていたのだ。

本当に一体どうしてこんなことになったのか、まだ幼かった平助にはわからなかったのだが。

父親だった男は頭を酷く打ち付け、気を失っていたところ煙草の不始末が原因と見られる火事で家が全焼し、後に死体で発見された。偶然外に遊びに出ていた平助は、焼け落ちた家の骨組みの前で一筋だけ涙を流した。少しだけは、本当に悲しかったのかもしれない。

首からは荷造り用のビニールひもに括りつけられた、母の形見の指輪があった。銀色のそれだけが、平助の持っている家族の思い出の全てだった。

そんな平助の身元を引き受けたのは、母の兄に当たる男だった。細かいことは気にしない大雑把な性格の持ち主で、彼はそういった意味で初めて顔を合わせた時に平助に言った。

「今日からは俺がお前の親父になってやるよ。丁度いいだろ、俺には息子が居ないんだ」

彼はそう、笑って肩を叩いた。体躯に見合った豪快な性格で、平助は実の父親以上に彼を慕うようになった。

勿論そんな簡単な話ではなく、養子として迎えるには役所による手続きが必要で色々面倒くさかったということは後で知った。

「なんだ、お前一人か。陽人も連れてこいって言ったじゃねえかよ」「アイツは今忙しーんだよ。ウチみたいに客が来ねえヒマな店やってるわけじゃねーの」

「全く口の減らねえガキだな。おめーみてえなバカに付き合ってくれてんだ、礼ぐらい言っとかねーとなあ。それよりさ、

お前帰ってくるの何年振りだよ。同じ市に住んでんだ、たまには顔くらい見せに来いっての」

「へいへい」

「相変わらずまともに返事しやがらねえ、だからお前はへい助って

んだ」

頬を掻く平助に、雄司は笑った。

「大体今の時間は客は少ねえもんなんだよ。これ言い訳じゃねえぞ」
「あーもう、わかってるって。それよりもさ、なんかおもしれえ話
ってねえのかよ？」

その言葉に雄司は少しだけ、影を落とした真面目な顔をした。

「南風会にやあ関わんな。ロクなことがねえ。お前、妙なことに首
突っ込んでんじゃねえだろうな？」

「まあ、色々なあ。ああでも心配はいらねえよ」

「全く、ちったあ親の気持ちも考えろよ」

平助は腹が減っていたので、簡単なセットメニューを注文した。
しばらくして厨房からはなにか、食欲を刺激する香ばしい匂いが漂
い始める。

料理に乗せたプレートを手に、再び雄司が姿を現した。

カウンターテーブルの前に皿を置き、雄司が平助に顔を近づける。
「相変わらず、ミナヅキにはホントかうソかわかんねえが、ロクで
もねえ話ばかりさ。お前が言ってた病院な、ミナヅキと関わって
るってこと」。

あそこもただにヤブなわけでもねえってな。なんでもミナヅキの人
体実験に入院患者を売ってるって噂が立ってる。

たいした病気でねえのに入院させられて、やたらめったら薬ばっ
かり飲まされるってさ」

「へえ、おもしれえな、それ」

「南風会の若いしがミナヅキの白服と歩いてるってのも最近見ねえ
しな。殺されたってのも案外嘘じゃねえのかもなあ」

「白服？」

「研究室の人間のことさ。ただ、極秘の部類のな」

「ミナヅキの事故のニュースじゃあ言っただけさ。死人が
出たっての案外それなんじゃね？」

平助はハムやトマトが挟み込まれたサンドイッチを一口齧った。

「そうかもなあ。ああ、お前が言ってた金井沢と、南風会の接点は今のところ聞かねえなあ」

「そっか、ありがと」

残ったコーヒーを啜りこむと、平助は立ち上がった。

「それよりお前、掃除会社に就職してんだろ、ちよつとウチの大掃除すんの手伝えよ」

「ソレは俺の仕事じゃねえの。俺がやってんのは営業だから」

「そーかい。にしても、お前が人様の役に立ちたいとはなあ。天変地異の前触れじゃなきゃいいな」

平助は笑いながら勘定をテーブルに置く。雄司はいらねえ、といった仕草をした。

「ウチの息子が惚れ込んでんだ、陽人がどんな野郎だか、いっぺん見とかねえとな」

「キモイこと言うなって。じゃあ、ありがとうな。親父の飯、やっぱウマイよ」

雄司は満足そうな笑みを浮かべて、出ていく息子を見送った。

帰り際、平助は建設途中でスポンサーが放置した、リゾートホテルを訪れた。ソファやベッドといった調度品は室内に揃えられている。

便利が良くアジトとしてもよく使われるそこは平助の遊び場所でもあった。

勿論、一般家庭の子どもは近づくことさえ親に制止される場所ではあるが。

かさかさ、と何かが移動するような音が聞こえたと思ったら、平助の目の前に一人の子どもが姿を現した。

「なんだ？」

子どもは平助に気付き、じっとこちらの方を見つめている。頭に、包帯をぐるぐると巻き付けたパジャマ姿だ。

どこか病院かなにかから逃げ出してきたような。

「どしたんだお前、一人なんか？」

子どもはうん、と大きく頷く。その瞳を輝かせて、平助に言った。

「ねえ、兄ちゃん。諷とあそぼう」

「フー？」

その時、その場にやってきた男が、子どもの手をぐっと掴んだ。

髪をきちんと整えた、身なりのいい男だ。ただどこか、一般人とは異なる雰囲気醸し出している。

「ああ、どうも」

男は子どもの手を引くと、そのままどこかへと行ってしまった。

死体を捜す女

平助と別れてからすぐに、陽人の携帯が鳴った。

「はい。桃、一体どしたんだよ」

「ああ、陽人。昨日はありがとう。それでね、話したいことがあるんだけど。今日時間取れない？」

「そりゃあマリーに言ってくれよ」

「って、陽人。アンタ今どこに居るの？」

「どこって、バス待つてんだけど」

「あの子は」

「ウチに居るよ」

陽人がそう答えると、受話器の向こうで桃が怒鳴り声を上げることが聞こえた。

「ちよつとアンタ何考えてんの、あの子が狙われてるってわかってんでしょ、相手は南風会よ？何で一人にしてんのよ、バカじゃないの！」

その声に、陽人が思わず耳から離れた携帯を再び当てて答える。

「仕方ねーだろ、他に頼めるようなヤツも居ねーんだしよ。俺と関わってるって知られてなきや大丈夫なんだろ？」

「それが、……あもつ、事情が変わったの！行くんなら一緒に連れて行けばいいでしょ。マリーに見ててもらいなさいよ」

それじゃあ後で、そう告げると通話は切れた。陽人はうーんと唸り、頭をがりがり掻いた。

丁度通りかかったバスを見送り、陽人は元来た道を急いだ。息を切らして自宅まで辿り着くとポケットから探り出した鍵を差し込み、ドアを開ける。

がちゃん、と入口の方で聞こえた音に顔を上げたひな太と目が合った。ぼと、と涙が零れ落ちる。その目が真っ赤になっていた。

陽人はそこでようやく、自分がとんでもない間違いを犯していたこ

とに気が付いた。

「ヒナ、」

陽人が近寄るとひなたは腕を回して抱きついてきた。ぐすぐすと鼻を嚙る音が聞こえる。

「ごめんな、ヒナ。俺ヒナの気持ち全然考えてなかった」

ひなたは小さな声を上げて泣きながら、首を振った。

「ごめん、ごめんね陽人。ヒナ、大丈夫だから」

陽人はその髪を撫でてやった。

「無理すんな。……今日は、俺と一緒に仕事行こうか」

「……うん」

ひなたは陽人のシャツに着替え、また簡単に変装する。陽人の服は大きすぎるようだが、どうにか男の子に見えるように取り繕った。結局会社には、二日連続で大幅に遅刻することになった。

恐る恐る開いたドアの先で、マリーが待ち構えているかのように立っていた。

「アンタたち二人、最近たるみ過ぎじゃない？今何時だと思ってるのよ」

「ああ、平助から伝言。今日は急用で休むって。それとすまねえが、コイツをここで預かってくれねえか」

陽人は後ろに隠れていたひなたをマリーの目の前に突き出した。

「何？一体どうしたのよこの子」

「理由は後で話すよ、時間がねえんだ。ああ、ウチはただの清掃業者で、コイツは善良な一般市民だ、そこんとこ宜しく」

マリーは状況の把握が出来ないまま、怯えた様子で見上げているひなたを見た。

「あんだ、この子とどういう関係なの？まさか誘拐とかじゃないんでしょ」

「まあ、頼むよ。コイツはアンタが拾った三匹目の野良猫さ」

奥から、猫たちがやってきた。オブシディアンがひなたの足に纏わりついている。

ひなたが手を伸ばすと、すんとその腕の中に飛び込んで丸く収まった。

「可愛い」

ひなたはその黒い毛並みに頬を寄せる。マリーがふん、と息を吐いた。

「……野良だつて、コイツは血統書付きじゃないか。聞いたことがないよ。アンタ会社をなんだと思つてんだい」

オーシャン・クリーンサービスのあるテナントビルの前に、一台の車が停車した。男が先に降り、後部座席のドアを開ける。桃は陽人の携帯を鳴らした。

「今、アンタの会社の前よ。そつちはどうなつたの？」

「ああ、まあ、……上がつてくれよ」

携帯からは陽人の妙に疲れた声が聞こえた。

桃が4階にある事務所のドアを開く。そこで目にしたのは、異様な光景だった。

デスクや来客用のソファ、ありとあらゆる場所に衣装が引っ掛かり、あるいは積み重ねられている。

ひっくり返したようにテーブルの上に広がる貴金属の山の上で、オプシディアンら猫たちが興味深々といったふう喉を鳴らしていた。

その奥で、マリーの趣味全開の派手な衣装に着替えさせられたひなたと、隣で頭を抱える陽人が居た。

ごそごそと衣装ケースを探っていたマリーが、また新たに真っ赤なドレスを引っ張り出している。

「ほら、やっぱりこっちの赤い方が似合うよこの子」

「っーかどこにあつたんだよこの服！冗談じゃねえぞ俺の安月給！」
ひなたはマリーのドレスに瞳を輝かせている。

「マリーが渋つてんじゃないかって、あたしからもお願いに来たんだけど……余計な心配だつたみたいね」

「まったく、さつきまでブツブツ文句言ってた癖に」

赤いドレスに着替えたひな太が、裾を持ち上げ、さらさらした布地の感触を楽しんでいる。

ぱつと手を離すと一度、くるりとその場で一回転した。ふわ、とドレスが広がって、すくと収まる。

陽人は思わずひな太を見つめた。男の子だとわかってはいても、その目が思わず釘付けにされる程の可愛らしさだ。

それはマリーも同じのようで、自分の見立てに満足げな笑みを浮かべている。

「マリーは娘が出来たみたいでさ、嬉しいんじゃない？」

「……いや、孫だろ」

「陽人、なんか言った？」

「い、いやなんでもねえよ」

陽人は慌てて首を振った。

マリーはそこでようやく、来客に気がついたようだ。

「あら、桃じゃない、久し振りね」

「マリー、ちよつと陽人借りるわね。大事な話があるの」

「あら、そんなの全然構わないわよ、どうせヒマだし。アタシがこの子を見てればいいのよね」

「ババアノリノリじゃねえかよ」

陽人の暴言に強烈な肘鉄で答えた後、マリーは言った。

「デートでしょ」

「違げーよ!」

桃はくす、と笑うと腕を組み、陽人は引つ張られる格好になって歩き出した。

「あら、誤解しないで。あたしと陽人は、そんなんじゃないわよ」

そのままばたん、とドアが閉められる。その時、ひな太が少しだけ拗ねたような表情を浮かべているのが見えた。

桃に連れられて訪れたのは、彼女の実家の近くにあるこじんまりとした喫茶店だった。朝食がまだだという彼女に付き合い、二人は奥まった席に座る。

「昨日はありがとう」

陽人はコーヒーを一口啜った。

「ああ。なんかいい情報でも手に入ったんか」

「ええ。中々口を割らないから苦労したんだけどね。色々。まあ死んではいないんじゃないかな」

「おつかねえな」

桃はふ、と冷たい笑みを浮かべている。

「南風会は、もともと寄せ集めの集団なの。決まった場所に集まるわけでなく、メンバーは年齢や性別までバラバラ」

「奴らがアジトにしてるのは、ホテル以外にも何か所があるってえのは知ってる」

「昨日の男が吐いたのは、今、アイツらを取り仕切ってる人間のこよ。星崎啓。こいつは、ミナツキの白服の一人なの。これがどういう意味かわかる？」

「ソイツは、」

「ミナツキを通じて、南風会と金沢病院は繋がっているの」

リーダーを務める男が、その製薬会社の極秘研究部門の人間である、ということはある、

南風会とミナツキがイコールで結ばれる、ということを示している。これで、金沢病院とののはっきりしたつながりの存在が明らかになったのだ。

「なあ、桃。お前にどんな事情があるか知らねえけどさ、これお前個人で動いてんだろ。もうこれ以上アイツらのことに首突っ込むのは止めとけて、アブねえことすんな」

陽人は目の前の、まだ17歳になったばかりの少女に言った。桃は家の事情がなければまだ高校生の女の子なのだ。

「あたし、捜してる人があるの」

桃がそう、呟いた。静かな声だった。

「あたしの、一番大切な人。その人、アイツらに殺された。もう一年になるんだけど」

陽人は息を呑んで桃を見つめた。

「アイツら、ご丁寧になんかふうにやったのか、ビデオに撮ってあたしに送ってくれたわ。……今でもはつきり覚えてる。何度も殴りつけられて骨の砕けるような音も、あの人の叫ぶ声も」

桃は伏せていた顔を上げて、陽人を見つめた。

「あたしにはやらなきゃいけないことがあるの。こんなふざけたことをやったアイツら全員、あたしが地獄に叩き落としてやるわ。……遺体はまだ見つからないの。」

こーちゃんを捜して、ちゃんと吊ってあげたい。聖くんのことも守れないで、あたしに出来るのってこんなことぐらいしか思いつかないの。どれだけ泣いて悲しんでも、こーちゃんはもう、帰ってこないのよ」

桃は一度だけ声を詰まらせたが、奇妙なほど冷静に、無表情のまままで話した。それは却って制御が出来ないほどの感情が彼女の中にあることを表している。

「ごめん」

「いいの。あたし、今まで誰にも、この話したことなかった。言うて、ちょっとだけすつきりした」

陽人は手持無沙汰にスティックシュガーの紙くずを弄んでいた。

頭の中には、少しだけひな太のことが浮かんだ。

桃はオレンジジュースを一口飲むと、打って変わったような声で話した。

「陽人、ここから先は、なんだか変な話になるんだけどさ。ミナツキの、今南風会が捌いてるってクスリ。あれってただの覚せい剤じゃあないって」

「クスリ？」

「パープルアイ、って呼ばれてる。人の脳に作用して、その。潜在

的にそういう力を持つてるっていうか、適性のある人間をいわゆる超能力者に変えるの。

南風会の連中の中にも何人かはそういった奴が居るって話よ。そいつ、そこまで言つて、急に人が変わったみたいになって、自分の舌を噛み切つたのよ」

「……なんか、嘘くせえな、そりゃ」

「あたしだつて信じらんないけど。もしそうなら、あの子が狙いならその妙な力でどこに行つたつて見つけられるかもしれない。アイツらの目的は知らないけどさ、

ねえあの子、なんか妙なもの持つてたりとかしない？」

「妙なモン？」

陽人はなにか引つかかる気がしたが、それが何かはわからなかった。

3人組

派手なドレスにじやらじやらしたアクセサリーを身に着けた中で、首から下げたひな太の指輪が光を受けて、紫色に輝いていた。

ひとしきりファッションショー紛いの遊びを堪能したマリーは、ひな太をピンク色の比較的地味なデザインのワンピースに着替えさせた。

「この服はアンタにあげる。他にも気に入ったのがあったら持つていいよ」

「いいの？」

「アタシにはもう似合わないしさ。アンタ、あんまりこういう服買ってもらえないんじゃないかい？アタシは別にそんなの気になんないけどさ」

はっとして、ひな太がマリーをじっと見つめている。今まで、周りの大人たちから掛けられたのとは違う言葉に内心戸惑っている様子だ。

マリーは笑ってひな太の頭をそつと撫でた。

「可愛い子が可愛い格好して何が悪いのさ、ねえ」

「……ありがとう」

頭を下げた時にじやら、と鎖が垂れて指輪がピンクの布地の上で光った。

「綺麗な指輪だね」

マリーは不思議なものを見るような目をしている。

「これね、お母さんの指輪。陽人が届けてくれたんだよ。見てるとねえ、なんかほつとするの」

「なんだろ、パワーストーン？でもそれ、見たことないわね」

白い毛並みに金目の猫がやってきて、ひな太に向かってにゃあ、と鳴いた。ひな太がしゃがみ込むと膝に両手を乗せて覗き込んでく

る。

そつと猫を抱き上げた。

「この子はミアアシャム、っていうんだよ」

「ミアア、」

マリーは陽人が訳も話さず押し付けた子どもが一体どういった関わりを持つのか気にはなっていた。もともと話すつもりもないが、裏稼業については黙っていてももらいたい様子でもあった。

ただオブシディアンら猫たちが警戒せずに懐いたことで、この子を受け入れることに決めたのだ。

どうせまた、見過ごせず拾ってしまったのだろう。昔を思い出し、マリーはふつと笑った。

「ヒナは、陽人の友達なのかい」

「うん。陽人がね、友達になってくれるんだって、そんでヒナのこ
と助けに来てくれたんだ」

「そつか。アイツ、やっぱり変わんないわね」

「マリー？」

「アタシも昔一人ぼっちだったんだよ。騙されて、何もかも無くして、この町に来たんだ。会社始めて、ようやく食っていけるようになって、今じゃ立場が逆になってんだけどさ」

「マリーは、陽人の友達？」

「そつさ。だからヒナもアタシの友達だよ」

ひなたは腕の中のミアアシャムの背をそつと撫でた。

事務所の中を歩き回っていた猫たちが急にぎ、と一斉に同じ方向を向いた。黒い猫が隣の部屋に駆け寄り、爪をがりがり立てて引っ掻いている。

黒い猫に続いて灰色の猫も、5匹が一斉に扉の前に集まる。ひなたの腕の中の猫が「あ、と鳴き、すんと飛び出してその中に加わった。

「いったいどうしたんだい？」

マリーは近づいて奥に通じる部屋のドアを開いた。中は小部屋に

なっており、マリーのパソコンが置かれたデスクの先が給湯室になっている。

「ミアたちどうしたの、マリー」

「わかんないわ、お腹がすいたわけでもなさそうだし」

マリーとひな太も奥の部屋に移動した。ばたん、とドアが閉まる。猫たちは奥の戸棚と壁の隙間に身を潜めてじっとしていた。ひな太がしゃがみ込んで手を伸ばすと、僅かに指先が毛並みに触れた。物陰で光る目がこちらを見つめている。

「おーい」

ひな太が呼びかけても、猫たちは出てこようとしない。マリーは戸棚に仕舞い込んだクッキーの缶を取り出し、テーブルの上に置いた。

「なんか様子が変わわ」

お茶にでもしようと、湯沸しのスイッチを入れる。その時、近くで車が止まった音が聞こえた。直ぐにざわざわと、なにか男たちのざわめく声が聞こえてくる。陽人が帰ったというわけではなさそうだった。

オブシディアンが影を飛び出し、ドアの方を向いて毛を逆立てている。

車を運転していた男が、ここでいいか、と後部座席の男に向かって言った。帽子を目深に被った細身の男は、言われた言葉に対し肯定の意味を込めて頷く。

「おい、美鈴。起きろ」

男は隣の座席で眠り込んでいた女の子の肩を揺さぶった。

「うーん、」

車から降りると、運転手の男が忌々しげな目を二人に向けた。

「大体、そいつの勤め先なんか調べりやすぐにわかんだよ、超能力だかなんか知らんが、胡散くせえモンに頼らんだっていいだろ」

「いいじゃないっすか、便利なモンは使わなきゃ意味ねえっしょ？俺にははつきりわかるよ、例のブツはここにある」

ビルを見上げ、男が口の端を歪めるようにして笑った。同じようにビルの一室、オーシャン・クリーンサービスの看板を見つめて、男が呟く。

「俺には信じらんねえな、だったら何で俺には何の力もねえんだよ」帽子を被った方の男がからかうような声を出した。

「大塚さん、僻んでんじゃねえの？」
「うるせえ」

うーん、と伸びをした女の子がにつこりと大塚に微笑みかける。

「だったらさ、今度ほっしーにうーんと濃いいーの打ってもらえばいいじゃんっ。ここにあるんでしょお。そつたらなんかできるようになるかもよお」

「どうでもいい、俺はそんなもんに興味ねえしな。それより美鈴、いつちょ頼むわ」

「はい」

美鈴は右手を上げて返事を返した。4階のドアの前で、一瞬その両目が紫色の光を放つ。

「ばーんっ」

美鈴がそう叫ぶと同時に、事務所のドアが歪み、奥へ吹き飛ばされる。派手な音を立てて壁に衝突し、近くに置いてあったデスクの上の物は辺りに散乱した。

振動が収まった部屋の中に一步踏み入れると、美鈴はまた大きな声を上げて言った。

「あれー？誰もいないよおー」

後を追うように入ってきた大塚は美鈴の頭を軽く叩いた。

「うるせえ、静かにしてろ」

帽子を被った男、小柳は呆れたような声を上げる。

「あんま目立つような真似すんなって、星崎さんにも言われただろっ。色々やりにくくなる。俺らのことは知られちゃあ不味いんだよ。」

まあ、やりたくてしょうがねえのはわかるけどさ」

小柳は部屋の惨状を見て言った。

「それにしても、スゲーな」

「ああ、まだ奥に部屋があるよ」

美鈴は奥に通じる部屋のドアを指差した。

マリーはオブシディアンが見つめる先を見た。先ほど、何か大きな音がして、何者かが中に入ってくるのがわかった。

ひなたはテーブルの下でしゃがみ込んで震えている。ミーアシャムが慰めるようにその手を舐めていた。

マリーは携帯を取り出し、発信ボタンを押す。画面表示を見、その携帯をポケットの中に仕舞いこんだ。

「ヒナはここに隠れてな」

マリーはひなたにそう告げると、ドアを開いた。

「おっ」

ドアに手を掛けようとしていた大塚は、中から出てきたマリーと鉢合わせる。破壊された部屋の惨状を目の当たりにし、マリーは目を見開いた。

「アンタたち、ウチに何の用だい！」

「てめえ、ここのモンか」

大塚は小柳を振り返った。小柳は首を傾げている。

「ここで間違いないね、でもソイツじゃない」

大塚はマリーの背後の扉を見た。

「おい、お前の他にまだ、ここに居んだろ、どこだ、奥か？」

「さあ、何言ってるんだい。アタシ以外には猫しか居ないわよ」

美鈴の視線が宙からマリーへ、外れた窓枠が軌道を描き、それはマリーにぶつけられた。

「ぐっ、」

「ババア、命が惜しかったら大人しくしてな。まだ死にたくねえだ

る」

マリーは脇腹を抑えながら顔を上げる。大塚がにやり、とそれを見て笑った。

咄嗟にポケットから取り出した口紅大の容器を、マリーはそのにやけた顔面目がけて噴射した。

催涙ガスをまともにくらい、大塚は叫び声を上げながらその場に転がった。

「ぐああ、目が、ちくしょう、何しやがる」

駆け寄った小柳がマリーをドアの前から突き飛ばす。美鈴も恐る恐るといったふうに大塚に駆け寄った。

小柳がドアを開いた瞬間、マリーはその体に飛び掛かり、勢いではん、とドアが開かれた。

中から飛び出してきたオブシディアンもマリーに応戦する。

「ぎゃあ」

美鈴にも猫たちが飛び掛かる。美鈴の慌てようは相当なものだった。猫が苦手なのだ。

マリーを振り払い、小柳がドアに手を掛けた。その下をすり抜け、ひな太が外に飛び出す。

「ヒナ、逃げな！」

ひな太はおろおろした様子でマリーを見ている。どうにか笑顔を繕って、マリーは言った。

「アタシは大丈夫だから。もうじき、陽人が助けに来てくれる」

ひな太は頷くと、外れたドアから外に出た。

「ソイツだ！」

小柳が叫ぶ。美鈴から猫を引きはがし、二人はひな太を追って駆け出す。

美鈴の目が光り、ひな太の指輪の鎖がぶつり、と切れた。

「ああ、」

からん、とその場に転がった指輪を追って、ひな太は道路まで駆け出した。指輪を引き寄せようとして、美鈴が力を使おうとしたが

酷いめまいに襲われて、その場に蹲った。

「使い過ぎだ」

小柳はそう窘め、美鈴の体を支える。

指輪を握りしめ、ひな太はほっと息をついた。

「危ない！」

誰かが叫ぶ声があった。ひな太はその方向を振り返った。

手の中の指輪が衝撃を受けて宙を舞う、ひな太はそれを見ていた。体はなにか、突き飛ばされたような感覚があった。

乗用車のフロントガラスに衝突し、指輪はひな太の目の前にバウンドした。指輪の石に亀裂が走る。

紫色のかけらが、ひな太に向かって降り注いだ。指輪の石が、粉々に砕けて辺りに散らばる。

ひな太はそれを見て、さあっと血の気が引くのがわかった。目を閉じて、そのまま気を失った。

事務所のビルの前、道路にはブレーキ痕が色濃く残っている。ガードレールにぶつかった車の運転手がドアを開いて飛び出してきた。その前方で、ひな太が倒れている。

暫くたって、救急車のサイレンの音が聞こえてきた。

本当の依頼は

「間に合いそう？」

桃が心配そうな顔を陽人に向けた。

「クソっ、」

陽人は応答しなくなった携帯の通話を切る。

車は事務所へと向かっていた。マリーからの着信があり、何者かと争うような音が聴こえてきた。

2人は無事でのるのだろうか、陽人は深い溜息を吐く。全ては自分自身が引き起こしたことだ。その上、桃の忠告もあって、こうして事態の把握が出来るようなものだ。

それから直ぐに別の着信があった。平助からだ。

「陽人、なんかわかんねえんだけど、事務所がえらいことになってんだよ。お前知ってる？」

どうやら先に戻ってきていたらしい平助は、興奮した声でそう言った。

「平助、それが、……俺が居ない間に、何モンかがマリーとヒナを襲いやがったんだ。あともうちょっとでそっちに着く」

「なんか、爆発でもしたんか？前の道路じゃ事故ってるしさ、警察やらなんやでえらい騒ぎになってんぜ」

「マリーとヒナは？そこにやあ居ねえのか？」

平助は携帯を離れたらしく、周りのざわめきが聞こえてきた。しばらくたって、再び平助が言った。

「……陽人、やべえことになってんぞ。2人は、病院に運ばれたって。髪の毛の長い女の子が車に撥ねられた、つつつてる。お前、ここは俺に任せてこのまま病院行け、えっと、精華台ってとこ」

「まさか、ヒナが？」

傍で話を聞いていた桃は運転手に指示を出した。

「加藤、行先変更よ。精華台病院に行つてちょうだい」
「わかりました」

病院に着くと、入口でマリーが陽人を出迎えた。片手に杖を突いて、脇腹を庇うようにして立っている。

顔色が悪く、真っ白になっていた。

「陽人、ごめん……ヒナが、あの子が車に撥ねられたの」

マリーはすっかり落ち込んだ様子だった。日頃の彼女からは想像もつかないほど弱り切っている。陽人はそつとマリーの肩に手を掛けた。

「マリーの所為じゃねえ、謝るのは俺の方だよ」

「ヒナは、今医者に診てもらってる」

「そつか。……なあ、俺が居ない間に何があつたんだ？あの声の奴らつてまさか、」

マリーはその目に普段の色を取り戻し、少し控えめな調子で言った。

「ああ。アタシ達を襲ってきたのは、おそらく南風会の連中さ。……信じられないかもしれないけどさ、アタシの頭がおかしくなつたわけじゃないなら、あいつら只の人間じゃあない」

「マリー、それつてまさか、なんか……超能力とかそついうの？」

桃の問いかけにマリーは頷いた。

「あの、先ほどの……ご家族の方ですか？」

診察を終えたらしい医師がマリーに声を掛けてきたので、一旦区切り、それからひなたの居る病室へと移動した。

「外傷の方は殆どありませんでしたよ。せいぜい転んだ時に出来た擦り傷ぐらいなもので。当たり所が良かったんでしょうかね。ただ、まだ意識がない状態ですので

念のためこのまま入院して、後ほど詳しい検査を受けていただくようになります」

医師はそう言って、ひな太の顔を見た。

「その、ご家族の方とは連絡は取れませんか」

「わかりませんが、この子を引き取る手筈になっていると聞いているので。ただこちらからは何も」

「そうですか、」

医師は軽く頭を下げると、病室を後にした。

陽人達も退室するよう看護師が促す。一度だけ振り返って、陽人はひな太の顔を見た。

ただ、眠っているだけのような穏やかな寝顔だった。

「作戦会議だ」

遅れて病院に到着した平助が言った。4人は談話室で、テーブルに紙カップに入ったコーヒーが人数分置かれている。

丁度テレビのニュースでは事務所の付近の様子が映し出されていた。レポーターは事故のことについて軽く触れ、ひな太の名前がテロップで流れた。

交通事故の報道を終えると、直ぐに次のニュースに切り替わった。事務所の破壊については、触れてもいない。

「やっぱりね、あいつらの関わることには報道規制が入るみたいなの。色々やって揉み消しちゃうのよ」

桃は忌々しげな声を上げた。平助は頬杖をついてテレビ画面を見つめたまま言う。

「ヒナのばあちゃんがニュースで気付かねえかな？ねえか？」

「いざとなりやあ警察がなんとかすんじゃねえの？俺らにやあわからんけどさ」

「そう、その警察がウチに関わってきたらやつかいだわ。取りあえずはアタシが対応するからアンタ達はしばらく身を隠してた方がいい」

マリーはそう言って、溜息を吐いた。

「あの建物、ただでさえボロイのにさ。やってくれるわよ全く」

「猫たちのことは、ウチで面倒見るから安心して」

加藤と西村の二人が、猫たちを回収したケージを抱えて見せた。

「ありがとう」

「……南風会かあ」

平助がぼそつと呟く。

「その妙なクスリとやらも、試すのはワケなかったらうね。実験相手なんかいくらでも調達できる」

桃が話した奇妙な噂を聞いて、平助はうんうん、と頷いた。雄司から聞いた話も満更嘘でもなさそうだ。

「嘘くさいなんてもんじゃない話だと思ってたわよ。でも実際、マリーが見てるし。そういうクスリだって実際にあるんじゃないの」

「小野田は冤罪だったってわけだ」

平助はポケットから指輪を取り出した。事故現場から拾ってきた、ひな太のものだ。

はめ込まれていた石は砕けて、台座だけになっていた。

そこに僅かに残った欠片を見て、平助は言った。

「紫だからアメジストかなんかだと思ってたんだけどさあ。アメジストはこんな割れ方しないんだよね」

超能力を使う人間、奇妙なクスリ。実際に目の前にあるものを見て、陽人達に戦慄が走った。

「それ、ヒナの親父さんがよこしたヤツが、ミナヅキの言ってた盗まれたってヤクか、まさか」

「だったら、おかしい話じゃない？仕向けたのは実の父親ってことなの？なんでワザワザあの子が狙われるようなことをするのよ」

桃の問いかけに、陽人は少し考え込んだ。息子の事を思い、彼の身が危険に晒されるのならばと自らの命を絶った男。

「賭け、か」

「陽人？」

陽人は腕を組み、伏せていた顔を上げた。

「俺は、ヒナに全部力タ付けるって約束してんだ。このままにしておけねえ。ヒナが狙われるってんならそいつらをぶっ潰すのみだ」

「アタシも同じだよ。こんなんじや腹立って年が越せやしない」

桃は2人に同調するように続けた。

「あたしも……、ねえ陽人。あたしのこと手伝ってくれる？」

「もっと全面的に頼れよ、そこは」

「イヤよ」

「盛り上がってますなあ。そんな簡単な話じゃねえぜ、わかってんだろうけど」

平助は笑って、茶化すようなことを言った。取りあえずの危険を、釘を刺しただけのことだ。

「わかつてるだけの事でもまとめようぜ。場所、変えるか」

「ああ」

談話室に他の入院患者がやってきたのを機に、4人も立ち上がった。テーブルの上の指輪を、陽人は手の中に握りしめた。

風向き

本日二度目となる息子の来訪に、店主は半ば呆れた風な笑顔を見せた。

「いらつしゃい、……帰ってくるつつつたら連続でくるんだなお前」
「まあいーじゃん、なあ」

平助はへらへら笑って答えた。

店内にはそれなりの客が入っている。夜の営業形態に様変わりした店では、今ぐらいからが客の入りが増える時間帯だ。

桃は店内を見回し、へえ、と感嘆したような声を上げた。

「結構いい感じ。まだちょっとあたしには早いかなあ」

雄司は平助が連れてきた、陽人と桃に愛想のいい顔を向ける。

「アンタが陽人かい？話はよく聞いているよ。ウチのバカが世話になつてるってなあ。まあ、仲よくしてやってくれや」

「ああ、どうも」

「親父、」

平助が雄司を制する。奥にあるテーブル席に移動して、とりあえず適当に相手してくれ、と平助は言った。

3人はそこで、携帯に送られてきた現場の写真を見た。平助が言うとおり、何かが爆発したというのが適当な状態だ。

マリーの話では、そこに居たのは3人だけで、その内の一人はひなたと同じかそれより下の、まだ小さい女の子だったという。

「こんなん相手にすんのかよ、正面切ってちゃ勝ち目ねえぜ」

陽人はまだ俄かに信じがたい話に、物証を突きつけられて戸惑うのを隠しきれずにいる。マリーはこの写真を撮影した後、自宅に戻っていた。

まだしばらくは安静にしているように、と言われ、そうせざるを得

ない状態になった為である。

「まあなあ。でもさ、親父の耳にも入ってないってことは、そういった妙な力を使えるようになったのはここ最近の話ってことだろ」「おそらく、そう人数も居ない。希望的観測だけど。盗まれた薬を取り返しにくるくらいなんだから、製造も追いついてないんじゃないかな」

「多分、じゃわからないぜ」

桃はふう、と息を吐いた。

「あたしが今までに確認できたのはアイツらの屯してる場所、絞れば3か所くらい。アイツらは変則的な集団なんだけど、トップが一人いて、

みんなソイツに従って動くの。もともと行くあてもない連中の集まりだったんだけどさ。今は水無月かあ。メンドクサイことになってんのはその所為ね」

陽人はテーブルに飲み物を運んできた雄司に向かって言った。

「なあ、今、風はどっから吹いてんだ？」

雄司はふつと微笑むと、その方角を指す。

「もう、ずっと南の方から」

その先には海がある。廃墟となったりリゾートホテルがあった。

明けて30日。陽人の部屋に桃がやってきた。一応古くからの付き合いではあるが、ひなたの件で連絡を取って以来、なにやらずつと顔を合わせているような気がする。

「おはよ」

「なんだよ、一瞬誰かわかんなかったぜ」

今日の彼女は学校の制服姿で、長い髪を左右三つ編みにして垂らしていた。

さすがに年相応に、普通の女子学生に見える出で立ちだった。

「今日は学校にちょっと用事があるの。あの子が気になるからさ、

きつと陽人もそうだと思つてね。一緒に行きましょ？」

有無を言わず桃は部屋の中に入りこむと、まだ寝起きの陽人にそう言った。

「うーん、」

「ほら早く。あたし学校に行かなきゃなんないんだから」

隣で寝そべっていた平助を、陽人は軽く揺さぶった。起きる気配がしなかったので、今度は毛布の上から蹴りつけた。

「いってえ」

「つーわけだ、さつさと起きろ」

「優しくねえ、マジで酷いコイツ」

平助は涙目になって外した眼鏡を探している。

「あたしからの差し入れ。時間がないし、移動しながらになるんだけど」

桃は手にしていたビニール袋を差し出した。中は近くのコンビニで購入してきたパンや弁当の類が入っている。

「安心してよ、手作りじゃないからさ」

自ら料理下手であることを自覚しているらしい桃は、潔く出来合いの品に頼ることを決めたようである。

病院に着いたが、昨日訪れた場所は空になっていた。ひな太の意識が回復したという連絡はない。

担当医が、ため息交じりに言った。

「あの患者さんなら昨夜遅くに、別の病院に搬送になりましたよ。ちょっと考えられない話ですがね、なんでも

院長の指示によるものだそうです」

「あの、ひな太の具合はどうなんですか、」

「まだ意識不明のままでした。あちらの方が適切な処置を受けられるというのならともかく、規模の小さい病院でしょう」

腑に落ちない感情を隠しきれない医師がそう零した。

「どういことなの？」

桃がそう問いかける。3人ともわけがわからない、といった表情で医師の言葉を聞いていた。

「あの、すみません」

病室の前、一人の年配の女性が声を掛けてきた。背が低く白くなつた髪を一つに結わえている。一見して気の高さそうな老人だ。

「斉藤ひな太という子どもが、ここに居ると伺ってきたのですが。

あの、私の孫なんです」

「ヒナのばあちゃん？」

平助が思わずそう口に出したが、老女は構わずに頷いて答えた。

医師は再びひな太の状態の説明をする。

聞き終わった後、老女はなんだかほつとしたような声を出した。意外な反応だった。

「どうしたんですか？」

「正直良かった、と思うんです。これではらくは病院があの子を見ていてくれるんでしょう」

陽人は言っていることの意味がしばらく分からなかった。医師が口の端を僅かに歪めているのが見える。

「ばあちゃん、ヒナのこと心配じゃねえのかよ、面倒見るとって言ったんじゃないのかよ」

平助の言葉に動揺し、老女は視線を不安定に左右に揺らしながら言った。

「でも、こんな急だし、おまけに交通事故だなんて。面倒くさい子だよ本当。娘の子だから仕方ないけどさ」

ガン、と音が響いた。平助が病院の壁を力任せに蹴りつけたのだ。老女が驚いて引き攣った表情を浮かべる。

「君、止めなさい」

医師が平助を制した。怯えた声で老女が捲し立てる。

「だって、だって仕方ないでしょう？あの子はまともじゃないんだもの。女の子じゃないんだって何回言ったら止めてくれるの？私は

関わりたくないんだよ」

「なあ、ばあちゃん」

陽人が平助を押さえつけて、老女を正面から見据えた。身長差で殆ど見下ろすような格好になる。

「ヒナのこと、頼むからもつとちゃんと見てやってくれよ。アイツは本当に優しくいい子なんだ」

老女はぐ、と声を詰まらせる。陽人は睨むでもなかったが、気圧されたように押し黙ってしまった。

そういえば、と桃は思い出し、医師に向かって言った。

「それで、あの子は今はどこななの？」

「金井沢病院ですよ」

医師は不愉快そうに眼鏡を指で押し上げた。

真相への案内人

「うっそ、何だよソレ。マジでヤバいんじゃない？」

平助が思わず口に出した。混乱する3人の前に、一人の男が現れた。先程まで会話をしていた医師が男に一礼して立ち去る。ひな太の祖母もどさくさに紛れて逃げるように行ってしまった。通路にはその男だけが残って、陽人達を見つめていた。

「何なんだよ、アンタ」

陽人は男を真正面から見据えてみて、違和感に気付いた。男の目は焦点が定まっておらず、どこを見ているのかわからなかった。全くの無表情だ。その顔のまま男が喋り出した。

「はじめまして、ジョーカー様と、そのお友達の皆さん」

桃がはつとして、その男に問いかける。

「アンタが、まさか……星崎？」

男の顔が桃の方に向いた。だが、視線は合わせられてはいない。

「うん、ああでも、それはちょっと違うかな。この人は、この病院の院長で松本って言うんだ。僕はわけあってそちらまでは行けないから代わりに喋ってもらっている」

その言葉に、陽人の背筋がぞくっとした。これもそういう奇妙な力の一つだというのだろうか。

「やっぱり、あのクスリを持ち出したのは斉藤の方だったんだね。アイツも妙な動きをしていたからおかしいとは思ってたんだ。人の頭の中を覗き見るのが好きなヤツだったからなあ」

松本の体を借りた星崎が言った。声だけがやたらと感情豊かで、より一層不気味だ。

「大変なんだよあれだけの量を作るの。それなのにあんなもったいないことをして」

松本の手元が、何かの光を反射したように見えた、白衣の袖の下、陽人はそこに刃物が握られているのを見つけた。

近くには患者たちが屯しているロビーがある。騒ぎになるのはマズイと考えた陽人はぐっと押し黙って平静を装った。

「アンタ、南風会の連中なんか使って、一体何が目的なのよ。あれを作ったのがアンタなら、只のクスリじゃないってわかってるんじゃないよ」

桃の問いかけに星崎は何と答えたものかと、うーんと考え込むような声を出した。

「……ヒナをこっから連れ出したのは、お前の仕業ってわけか」

「そうだよ。僕は君たちと話がしたいんだ。だからあの子は、まあいっっちゃあ人質だよ」

「てめえ！」

襟首を掴まれた松本がははっと笑った。

「松本に手出ししたって僕は痛くも痒くもないよ？それよりあの子が大切なら、僕に逆らわない方がいいと思うんだけど」

通りがかった何人かが、陽人と松本を見て慌てた様子でその場を立ち去って行った。陽人が松本を解放する。苦しいわけでは無いくせに、松本がふうと大きく息を吐いた。

「俺らと話がしてえってんなら、コイツを通してじゃねえで直接面と向かって言えよ」

「うん勿論そのつもりだよ。君たちを案内しよう。ああ、もうわかってると思うけど変な抵抗はしないでよね」

松本がその手を陽人達に向けて持ち上げた。隠されていた刃物が露わになる。桃が息を飲んだ。

そのまま、松本に先導されるようにして玄関まで向かった。途中すれ違う他の医師や看護師に、松本はにこやかに声を交わしている。誰一人疑うような素振りも見せなかった。言われたところで、院長が妙な力で操作されているなどと信じる者などいないとは思うが。

入口の前に一台の車が停車していた。促されるまま、3人は車に乗り込んだ。運転しているのは大柄の愛想のない男だった。助手席に乗り込んだ松本が指示を出している。やがて辿りついたのは、あ

のリゾートホテルだった。南風会が使っているアジトの一つだ。

正面玄関に向かうと、その入口の前で一度足を止め、松本が振り返った。

「今から僕の居る部屋まで案内するから、ちゃんと付いてきてね」

「……言われなくたってわかってるよ」

「ん？」

平助は植え込みの中を移動する何者かに気が付いてその方向を見た。そこにはあの、前にも見かけたパジャマ姿の子どもが居た。

「アイツ、まだこんなところに」

「どしたんだ、平助」

陽人は平助を見た。彼はどこか焦ったような様子をしている。

「いや、なんかちっこいのがうるついてんだよ。この辺りはロクでもねえ連中のたまり場だっちゅうのに」

平助が見ている先に、陽人も小さな子どもを見つけた。5歳くらいといったところだろうか。親と離れているというのは随分と危なっかしい。

子どもはどうしたわけか頭に包帯をぐるぐると巻きつけていた。

平助はあの、連れ合いらしい男の姿を捜したが、見当たらなかった。

陽人は仕方ないなあ、と言ったようにふうと息を吐き出した。幼い頃の経験がそうさせるのか、平助には小さな子どもを放っておけない所がある。

「陽人、俺ちよつとアイツをこっから安全なところに連れてくわ」

「ああ、でも」

陽人は松本を見た。松本はくすつと笑った。

「ああ、別に構わないよ。君は物好きだね」

平助が駆け寄り、その手を取る。子どもが嬉しそうに笑った。

「兄ちゃん、遊んで！」

「遊ばねえよ、俺は忙しーんだよ。ほらさっさと行くぞ」

子どもの手を引いて、平助が町の方へと歩いて行った。

「どつする？」

桃が言った。

「平助が戻るまで待つ？」

「いいよ。君たちだけでも先においでよ。待ちくたびれちゃってさあ」

どこか陽気な声を上げてはいるが、無表情な男が手にした刃物を陽人達に向けていた。その刃先がきら、と光を反射する。

2人は促されるまま、ホテルの奥へと進んだ。

キッズルーム

星崎はふう、と息を吐いた。他人の体を使い続けるのに少々疲れた様子だった。イスがギイ、と軋んだ音をたてる。正面にある、銀色の機材の表面にそんな自分の姿が写り込んでいた。

どこか不安げで気の弱そうな、頼りない顔だった。つう、と片方の目から涙が一筋流れて落ちた。

星崎は頭をガリガリと掻きまわった。引き出しを開け、中からプラスチックのピルケースを取り出す。中には薄い紫色をした錠剤が入っていた。それを一掴みにすると、星崎は口に入れた。ラムネ菓子か何かのように噛み砕いて飲み下した。

一呼吸置いた後、顔を上げた。その表情が歪んでいた。けらけらと高らかに笑い声をあげた。

「ねえ君、待ち遠しいだろう。また友達が増えるんだよ」
星崎は一人、そう声に出して言った。

この近くに病院はあったらどうかと平助は考えていた。子どもはどこか、病室から抜け出してきたかのような格好をしている。

繫いだ手の、薬指に嵌められた銀色の指輪を子どもがじっと見つめていた。

「きれい」

子どもが平助を見上げて言った。

「なあ、お前。あそこは子どもが一人で居ていいよーな所じゃないんだ。危ねえからもう近づくんじゃないよ。お前、どこから来たんだ、一人なのか？」

子どもは平助の言葉を聞いてはいないようだ。ただじっと見上げている。ああもう、と平助が髪をくしゃ、と掻き上げた。

「ねえ、それ、とっつてもきれいだね。諷にもっとよく見せて」

平助は指輪のことを言っているのかと、左手を差し出した。諷がその手を取った。ぶち、とイヤな音がした。

平助は突然左手に走った激しい痛みで顔を歪め、はっとその目を見開いた。諷がうつとりした目をしてその指輪を見つめているのが見えたのだ。平助の、指輪を嵌めた指が千切れて無くなっていた。

「うわああ」

平助が左手を押さえて蹲った。

「兄ちゃん、どうしたの？」

諷が不思議そうな顔でしゃがみ込み、首を傾げる。平助が傷口を右手を使って握りこむようにした。指の間から止まることのない出血が滴り落ちる。子どもは平助の指を、まるで腸詰か何かの様にいと簡単に引きちぎったのだ。その指輪にまた見とれている。どうも自分のしたことが理解できていないようだった。

平助は青くなった。浅はかだったと、今更のように思った。ただの子どもがあんな場所に居るわけがないのだ。考えにくいし、そうは思いたくはなかったが。

この子どもは南風会の一員で、おまけにビルをも破壊した、あの妙な能力の持ち主なのだろう。それは覚せい剤の副作用だとかいう産物ではなかったか。つくづくサイテーだ、平助は痛みに顔を顰めながら思った。

「ごそごそとズボンのポケットを探り、諷が小さなルービックキューブを平助に見せた。

「ねえ、ぼくと遊ぼうよ」

諷はそう言って、面を合わせるようにルービックキューブを捻りだした。すればするほど、全部の色がばらばらになった。諷が捻るたび、豆腐のように手にした玩具がばらばらになって落ちた。

平助は目の前に零れ落ちた欠片をそつと摘まみ上げた。それには木で出来た感触があった。

「あれ、なくなっちゃった」

諷が手の中に僅かに残ったパーツを見て、残念そうな顔をした。

ばい、とそれを放り投げる。

平助は次第に増していく痛みを堪え、荒い呼吸を繰り返した。千切られた箇所がずきずきと痛んだ。諷が平助の腕をぎゅうと掴んで引つ張り上げた。大男に襲われたかのように平助は抵抗が出来なかった。とんでもない馬鹿力だ。諷は捕まえた平助の左手が、指が一本足りなくなっているのに気付いた。

「へんなの」

諷は平助の親指を摘まんだ。ぶち、とその親指を引きちぎった。「ぎゃあ」

平助が声を上げる。流れ落ちた血が、地面に溜まり始めていた。生臭い臭いがした。諷が指を放り投げた。

諷はそのまま左手の指を一本づつ千切っては投げ捨てた。平助の意識が遠くなる。やがてその場に気絶して倒れ込んだ。顔色は真っ白になっていた。だらしなく開いた口の端からは涎を垂れ流している。

諷の体は所々返り血で汚れていた。無邪気な顔をして、平助が倒れているのはどうしてだろうと首を傾げた。平助の顔を覗き込むように地面に近く顔を寄せ、ぺちぺちと頬を叩いた。平助が意識を取り戻し、わずかにその目が開いた。諷が寂しそうな顔をしている。「ねえ、兄ちゃん。寝ちゃうの？遊ぼうよ？」

平助は片手でどうにか体を起こし、傍らに座り込んだ諷の体をぎゅう、と抱き抱えた。諷が嬉しそうな声を上げて笑うのが耳元で聞こえた。平助の体はがくがくと震えていた。喉が潰れたような音で呼吸をしていた。

体を離すと、平助は諷と向かい合い、その目を見つめた。

「お前、していいことと、悪いことってあるんだ。わかるか？」

「わかんないよ、なんのことなの？兄ちゃん遊んでよ。だれもぼくと一緒に遊んでくれないんだよ」

諷がそういつて、平助にしがみ付いてきた。一人が寂しかったのか、ぎゅうと締め付けてくる。どこかで骨の碎けるような音がした。

「ぐっ……」

諷の腕の中で平助が力を失い、また地面にずしゃ、と打ちつけられた。

「兄ちゃん、どうしたの？」

平助は心配そうに自分を見下ろす、まだ幼い子どもを見た。誰も構ってくれないのだ、そう訴えた姿が不意に遠い昔の自分と重なった。

「……なあ、諷」

「なに？」

平助は間近に寄せられた諷の頬を右手で思いっきり抓りあげた。

「痛い！」

諷がぐす、とぐずった泣き声を出した。

「痛えだろ、痛えんだよ。……人を傷つけるってのはこういうことなんだよ。お前、誰にも、そんなことも教えてもらってねーのかよ」
諷はぐすぐすと泣き始めた。

「……ごめんなさい」

平助はふつと微笑むと、諷の頭を優しく撫でた。

「わかったから、もう泣くな」

諷がうん、と頷くのがどうにか見えた。平助は気が遠くなっっていくのを感じた。

ああ、しくじったなあ。陽人は、大丈夫かな？まあ、アイツは俺みてーにバカじゃねえか。

くす、と笑って、平助は目を閉じた。

諷は平助のシャツが血に塗れ、泥だらけになって汚れているのを見た。きれいな服と、着せ替えっこしようかと考えた。お人形さん遊びをするのだ。諷は平助の首元に手を掛けた。

そつえば、替えの洋服がここにはないと気が付いた。星崎に言えば、出してくれるだろうか。そう思った諷はホテルへと戻って行

つ
た。

ヤバめのスイッチ

そのホテルは何十年の間放置され、中は荒れ果てていた。廃墟と呼んで差し支えない。調度品は景気が良かったころの名残でそれなりの品が使われた様子だったが。幾つかは運び出されたのかがらんだこの部屋もあつたほどだ。

まともな部屋はしばしばアジトとして使われるような場所だった。今は南風会の持つ拠点の一つと言われている。

陽人と桃は、真つ暗なホテルの通路を松本に案内されるがままに進んだ。電気の点かない中は薄暗く、不気味な雰囲気か漂っている。「着いたよ」

くるりと松本が振り返つた。そこは奥にあるホテルの一室だが、見るからに他とは様子が異なつていた。入口の扉からして違う。自動のドアに改造されていた。何処かから電力を供給しているのか、そこだけ灯りが灯っている。

シューウ、と空気の圧縮される音がして、重そうな扉が目の前で開いた。

陽人はその異様な空間に足を踏み入れた。中はまるでどこかの研究施設のような作りになっていて、機械の立てる低い音が絶えず響いている。

「何なんだよ、いったい」

奥の方でイスに座っていた男が立ち上がり、入口にいる陽人達の前によつてきた。黒つばいスーツの上に白衣を羽織っている。間近でにっこりと微笑んだその顔は、どこか頼りなくも見える優男のようだった。

「僕が、星崎啓だよ。この姿では初めまして」

「何のつもりだよ、俺にはお前と話さなきゃなんねえことなんかねえんだ。ヒナに手を出すのは止めてくれよ」

星崎が哀し気な顔を向けた。

「ジョーカー、君は僕と仲よくしてはくれないんだね、どうしてだろ？」

どこかからかうような口調だった。星崎は顔を覆い隠すようにして笑い出した。そうしてもう一度上げた顔には、僅かに狂気の色があった。

「……何よ、なんなのよアンタいったい！ 訳わかんないこと言ってるんじゃないわよ！」

陽人よりも先に、桃がそう怒鳴りつけた。このホテルに着いた時から彼女の中でずっと燻らせていた思いが、ボスを前にして一気に爆発したようだった。

星崎に食って掛かろうとしている桃の背後で、松本が動いたのを陽人は見た。きら、と光を反射する切っ先が向けられている。陽人は咄嗟に桃を庇うようにして両者の間に飛び込んだ。松本の手元にある大ぶりのナイフが深々と陽人の脇腹に差し込まれた。

「ぐっ……」

「陽人！」

振り返った桃が悲鳴に近い声を上げた。松本が引き抜いたナイフの表面に、べったりと赤いものが付着していた。陽人の押さえこんだ指の間から滲み出した出血が冷たい床の上を滴り落ちる。幸い、急所は外れているようだった。

星崎がまた元のように、にこにこしながら陽人を見ている。その傍らで松本が人形のように固まっていた。松本が攻撃してきた際、星崎は動かなかったような気がする。おそらく動かせるのはどちらか一方なのだろうと陽人は考えた。星崎が心配そうな表情を貼り付けて近づいてきていた。

「桃、こっから逃げる！」

「え、そんな、陽人」

「誰でもいいから助けを呼ぶんだ、アイツが固まってるうちに行け、俺なら大丈夫だから！」

桃は頷くと部屋の外へと駆け出した。星崎は以外にも、桃を追い

かけようとはしなかった。陽人の傷を見て、哀しそうな顔をした。

桃は廊下を走りながら、カバンの中の携帯電話を取り出した。個人として動いているだけに、呼び出せるのは自分の直属の部下である加藤と西村ぐらいだ。平助はもう戻ってきているだろうか。桃は携帯電話を開いた。それがふわ、と桃の手元を離れ、ずっと先の壁に叩きつけられた。

「何？」

慌てて駆け寄ってみる。拾い上げた携帯電話は反応しない。壊れてしまったようだ。

「ちくしょう」

桃が気配に気づいて振り返った。そこに、一人の少女が立っているのが見えた。じつと桃を睨み付けている。不意に桃はマリーの言葉を思い出した。事務所を破壊したのはまだ小さな女の子だったのだ、と。

「何なのよ、アンタ」

得体のしれないものへの恐怖が勝手に足をかくかくと震えさせたが、桃はどうか立ち上がると体勢を立て直した。それを見て少女がふん、と笑った。

「あたし、髪の毛の長い女って大嫌いな」

その少女、美鈴は言った。その目が一瞬紫色の光を放ったように見えた。桃の顔を掠めたものがあつた。ガン、と後ろの壁に突き刺さったのは大ぶりの裁ち鋏だった。ぱさ、と結わえた髪の毛の束が床の上に落ちた。桃が息を飲んだ。

また美鈴の目が光る、桃は慌ててその場から離れた。後ろの壁に、逃げる桃を負うように金属の棒がガン、ガンと連続で突き立った。

「逃げんな！」

美鈴はホテルの廊下に散在したガラスや棒状の金属片へと手当たり次第に力を送り、それらをダーツの矢の様に桃に向けて放った。

コントロールがあまり良くないのは感情的になり過ぎている所為もあるのだろうか。桃はどうにかこうにか直撃は避けた。避け損なった何かが制服の厚い生地を切り裂いた。

「ああ！」

それは桃の足をざっくりと傷つけた。左の太腿から血が流れて落ちるのが見えた。ずきずきと痛みだし、桃はその場から動けなくなつた。

美鈴が近づいてくる。桃はさあつと顔色を変えた。

「ばっかみたい。アンタって逃げるしか出来ないの？もっと根性みせなよお。でないと全然面白くないよ」

「……アンタ、」

「大人ってヘンなのばかりだね。アンタもあのビデオの男みたいにしてあげよおか？」

美鈴がにやりと笑って言った。その言葉を理解した瞬間、桃の体の震えがぴた、と治まった。

「ビデオ、って」

「あれねえ、すごい面白かったんだよお。大の大人が何も出来ないなんて情けないよねえ、弟が大事なんだって？あたしにはわっかんないや」

桃は黙って美鈴がべらべら喋るのを聞いていた。

「なによ、なにか言ったらどうなの。今度はアンタのこと、あたしが撮ってあげよおか！」

「てめえ！」

飛び掛かってきた美鈴に桃がそう怒鳴りつけた。

思わず美鈴がびく、と体を強張らせるほど、怒りの感情に満ちた声だ。桃は美鈴の顔を掴んで、後ろの壁に力任せに打ちつけた。

「ぎゃあ！」

そのまま前髪を筆るように引き寄せ、自分の方へと強引に向けさせた。桃の目が真正面から美鈴を睨み付けている。

美鈴は頭がくらくらするのをどうにか堪え、その目を紫色に光ら

せた。据え付けられたままになっていた、錆びついた消火器が外れ、桃の体にまともなぶち当てられた。衝撃を物ともせず、桃が再び冷たい壁にがつんと美鈴の頭部を叩きつける。軽い脳震盪のような状態になって、美鈴が床に崩れ落ちた。桃を見上げた、美鈴の目が恐怖で見開かれていた。

その目を左右に動かし、近くになにか目ぼしいものはないかと探った。プラスチックの破片を桃に向けて飛ばした。それが桃の頬をざっくりと切り付けた。見る間に血が滲み出して、赤い滴がぼたぼたと落ちたが、桃は微動だにせずじつと睨み付けたままだった。

美鈴はもう一度何かを探した。しかしもう手ごろなものが見当たらなかった上、力を使い果たしてしまったようだった。美鈴は恐怖でかたかたと震えだした。

「何よ、もう終わりなの？」

今度は美鈴が動けなくなっていた。腰が抜けてしまったようだ。

桃が胸倉をつかんで立ち上がり、その顔を殴りつけた。

桃は何度も、手加減なしに美鈴を殴りつけた。手を離すとふら、とその場に崩れ落ちた美鈴の腹の上をどす、と蹴りつける。

「助けて、もう止めて」

美鈴が呻き声を上げた。ぼろぼろと涙を零した、その様子を見て桃がふん、と鼻で笑った。

「アンタ、バカにしてたんでしょ？こーちゃんのこと。あの人、一言もそんな泣き言言わなかったわよね？あたしは知ってるんだから」

美鈴は腫れあがり、熱を持っている頬を手で押さえた。まだ小さい女の子ということもあって、ここまで無遠慮に殴られたのは初めてだった。

本気で殺すつもりなのだ、美鈴にはそれが良くわかった。目の前の女はとんでもなく冷たい目をしている。ぶたれた痛みで美鈴の頭はパニック状態に陥っていた。こうなれば今までまともに謝ったことすらなかった高慢ちきな少女のプライドもへったくれもなかった。「許して、謝るから、お願いだから！」

「うるせえ、ごちゃごちゃ言っでんじゃねえ！」

桃が怒りにまかせてもう一度、美鈴の体を蹴りつけた。

「あたしは決めてるんだ。アンタ達全員、一人残らずあたしが地獄に叩き落としてやるんだってね。それが女だろぅがガキだろぅが関係あるか！」

がんと桃が壁を殴りつけた。美鈴が意識を失い、地面にべしゃ、と倒れ込んだ。

顔を腫れあげさせ、ぐったりと目を閉じている。桃はその少女にもうなにもする気にはなれなかった。怒りで我を忘れていた。少しだけ頭が冷えた。そうするとまた傷口が痛み出した。桃はがっくりと床に膝をついた。

「助けを、呼ばないと」

桃は立ち上がろうとしたが、左足が全くいうことを聞いてくれなかった。

ざり、ともう一人、新たに加わった足音に桃がその方向を向いた。そこには帽子を目深に被った男が立っていた。片手に長い棒状のものを握りしめている。その彼が、惨状に目を見開いていた。

ヤバいかもしれない。

桃は動けそうになかった。覚悟を決めて、ぐっと目を閉じた。

なにやら鈍い音がして、誰かが悲鳴を上げるのが聞こえた。何事だろぅかと、桃が恐る恐る目を開けてみた。

「大丈夫か？」

誰かがそう、声を掛けてきた。

ともだち

陽人は着ていたジャケットを脱いで丸め、傷口に押し当てた。出血が止まらず、痛みで意識が飛びそうになる。傍らで見つめる星崎は何故だか悲しそうな顔をしていた。

「何なんだよ……さっきまでトチ狂ったツラしてやがったくせに、全く忙しい奴だな」

星崎は殆ど脅すような手口でこのホテルの奥まで陽人達を連れ込んだ割には、平助が脱線することも、桃が逃げ出したことさえどうでもいいことのように流していた。星崎の目的が何なのか、陽人にはわからなくなっていた。

そのいう斉藤に託された例のクスリにしても、陽人達の手元には残っていない。だとすれば、そのことに対して言いたいことの一つでもあるというのだろうか。

「……話って、何だよ」

「するつもりになってくれた？」

星崎が嬉しそうな声で言った。

「さあな、どつちにしろこのままじゃ時間切れになっちまうぜ」

「縁起でもない」

「てめーがやったんだろがよ。相手は女だぞ、どうなってんだよてめーの頭ん中」

星崎が話している間、マネキン人形のように固まったままの松本の手には、乾いた血液の付着した刃物がしっかりと握りしめられていた。松本がすたすたと歩きだし、部屋の片隅に腰を下ろした。

「うん。まあ僕は、君だけに用事があったんだよ。僕は君の二つ名が気に入っていてね。きつと楽しいことが起きるかもしれない」

「どいつもこいつも、一体なにやってんだよ」

星崎は白衣のポケットから取り出したアンブルに注射針を突き立てた。透明のシリンジに濃い紫色をした液体が注入される。

「何だよソレ」

「ヒミツ」

星崎がにや、と笑った。改めて訊くまでもなく陽人にもわかっていた。パープルアイだ。あのやつかいな、クソろくでもないクスリだ。星崎がじつと陽人を見つめている。

「うん。取りあえず、今残ってるのはこれだけなんだ。また作らな
いと、これじゃあ友達が増やせないじゃないか。酷いよ、ねえそ
うだろう？」

訳のわからないことを言いながら星崎が近寄り、陽人のシャツを
ぎゅうと掴んだ。以外にも力が強く、陽人は半ば引きずられるよう
にして部屋の奥へと歩かされた。

「見てごらん、陽人」

部屋の奥には、なにやら大がかりな機材と、箱状の物が設置され
ていた。それは大きな水槽のように見えた。内部にぼうつとした光
が灯っている。

陽人はそこにあるものを理解した瞬間、あまりのことに傷口が痛
むのも忘れて表面のガラスに両手をついた。驚いて、声も出せな
かった。

水槽の中には人が浮かんでいたのだ。いや、人のような何かだっ
た。陽人の正面で、眠っているかのように穏やかな表情で目を閉じ
ていた。皮膚の色が透き通る程白く、内部の血管が透けていた。そ
の体を何かしらの管で繋がれていた。見たところ男性らしかった
が、その顔は少年のようにも、または少女のようにも見えた。性別
も、年齢もはつきりとしなかった。

「失礼だなあ。そんなに驚くことないじゃないか。ねえ？」

ただ茫然と見つめる陽人に星崎が呆れたような声で言った。

「うん、興味がある？ そうだね、僕とはずいぶんタイプが違うよ
ね。面白いかもしれない」

今度は陽人に向けての発言ではなかった。星崎の顔はどこか違う
場所を見ている。独り言にしては奇妙な物言いだった。

「さつきから、何言ってるんだよ」

星崎が視線を陽人に戻した。

「うん、今の君には、この子の声は届かないんだよね。……ジョーカー、僕にはね、昔っから他人の心の声が聴こえるんだ。……嘘じゃないって。下らないこと言うなって？まあそうだ。普通は信じられないんだよね。だから今まで誰にも言わなかったんだよ。何をそんなにびっくりしているの？ああ、刺された所が痛むかい。頭の中がごちゃごちゃしてる。もっと落ち着きなよ」

星崎はニコッと笑った。陽人の心の中を、そっくりそのまま読み上げて。

「この子？うん、紹介したいんだけど、名前がないんだよね」

「こいつは……人、なのか？」

「うん」

星崎がどこか遠くを見つめるようにして言った。

「僕が以前に関わっていた研究施設で生み出されたモノさ。まったく、おぞましい実験だよ。君はゴミとして処分される人間を見たことがあるかい？ああ、いや、この子は不要なモノとして処分すらされずに放置されていたんだ、ゴミですらないな」

また陽人の心中を読んだらしい星崎は、そうだね、と呟いた。

「僕には、彼の声が聴こえた。その時にはもう僕自身が限界を感じていたんだ。丁度良くチームから抜けるメンバーでいざこざがあったさ、そのどさくさに紛れて僕はこの子をこっそり連れ出すことに成功した。まあ、こんな大がかりな設備が要ったんだけど、資金はいくらでも調達できたからね。僕は研究に関わる一方で、ずっと別のクスリの開発をしていたんだ。それが、このパープルアイだよ。人工的に能力を付与するクスリ。上手くいけばね。まあいつちゃあヤバ目のクスリでもあるから、廃人になっちゃう人もいる。実験に協力してもらったのなんて屑みたいな連中だったからどうでもいいんだけど」

陽人は病院にまつわる奇妙な噂を思い出した。

「金井沢の入院患者を使って、実験してやがったのもてめえか」

「バレてたんだ」

星崎は事もなげに言った。

「寧々は、」

「僕が欲しいのは、僕と同じ能力だけなだけでさ。どうもその人間の性格やなんやが大きく関わるみたいだね。癩癩持ちなら物を手当たり次第に投げ飛ばすし、臆病者は索敵能力を手に入れたりするでも僕は、この子の友達が欲しいだけなんだよ。僕とおんなじ、心が通じ合える力を」

そこで星崎は、先程拵えた注射器を陽人に向けた。息を飲み、陽人がその先端を見つめる。

「斉藤が君に息子とクスリを託した理由なんかは知らないけどさ。その代償は払ってもらおうよ。君が大人しく実験を受け入れるのなら許してあげる」

「俺に、その下らねえ能力者のお仲間に入れてか、バカバカしい」
星崎がふつと鼻で笑った。

「……注射が怖いのかい？大丈夫だよ、痛いのは最初だけだから。君が嫌なら、そうだ、ヒナって子にやってもらおうかな。父親が生まれつきの能力者なんだから君より素質があるかもしれない」
「止める！」

星崎がにいつと笑った。嫌味な類の笑顔だった。

陽人の腕に、注射針が突き立てられた。じわじわと、紫色の得体のしれない液体が注ぎ込まれる。吐き気がした。

「……後で、一発殴らせろよ」

「ふふ、」

からん、と役目を終えた注射器が床に落ちた。陽人は目の前の星崎を見た。急に頭を殴りつけられたような感覚があった。頭の中をなにか真っ黒なものが急速に蝕んでいる。陽人は床に倒れ込み、そのまま意識を失った。

心が繋がるすべて

陽人の耳元で囁くような声が聴こえてきた。それは直接脳の中に響く音だった。

「何だ……？」

冷たい床から、陽人はどうにか上体を起こした。刺し込む痛みに顔を顰める。陽人の意識が回復したのを見ると、星崎が笑った。

また誰かが話しかけてくる声が聴こえた。どこか不安そうで、何かを訴えかけてくるような声だった。その中に僅かながら楽しいよくな、好奇心で興奮するのを抑えきれないような調子も含んでいる。星崎の声ではなかった。

「お前は一体、誰なんだ」

「……驚いたよ」

星崎がそう感慨深そうに呟いた。その声は陽人の目の前にある箱の中から聴こえていた。声の主が驚いた様子で言った。

（君は、誰？ 啓じゃないの？ ねえ、僕の声がきこえるのかい？）

「……ああ、」

（すごい、ねえ君、こっちにおいでよ。いっぱい話を聞かせて？ ねえ友達になつてよ）

弾んだ声に急かされるように陽人は立ち上がった。流れ出した血液で腹が床に貼り付いていた。固まっていた血がべりべりと剥がれて落ちた。

陽人は水槽の前に立った。中に浮かんだ人物は何の表情も浮かべずに人形のように固まっていた。

「なあ、この声はお前なのか？」

（ねえ、君は誰？）

「……お前こそ、一体何モンなんだよ」

（……どうして、話してくれないの？）

「ああ？」

「陽人、そんな乱暴なこと言わないで。……そうだね、君にもこの子の声が聴こえるようになっただね、すばらしい」

「わけわかんねえよ、何なんだよ」

「陽人。その子には直接、君の声は届かないんだよ」

陽人は水槽に浮かんだ人物を改めて見つめた。何も変わらないが、心なしか寂しそうな表情に見えた。

（啓、この人陽人って言うの？）

「そうだよ」

星崎が優しいな笑みを浮かべてそう答えた。

（陽人、）

陽人ははっとなった。そうして、水槽に向かって手を伸ばした。中で漂う人物とは直接には触れられそうになかった。陽人はそつと指でとんとん、とガラスの表面を突いた。それから、その人物に触れるように、手の平をぐつと押し付けた。ガラスの水槽全体がどこか温かい力で包まれた。その腕を通して、陽人にその人物の声が聴こえてきた。

（ああ、陽人の声が聴こえる。僕とお話してくれるんだね）

「……ヒナ、」

それはひなたが教えてくれた、おまじないだった。

（どこだろう。ねえ、なんだかどうともいい気分なんだ。啓が教えてくれた、お外って、ねえこんな感じ？なんだろう、なんだかどうとも安心するんだ。ねえ、陽人、楽しいんだ）

陽人ははしゃぐ声を聴きながら、言いようもない感情で涙を流した。涙がぼたぼたと冷たい床の上に落ちた。星崎がそれに気付いたようだった。

「……ありがとう」

そう、ぼそつと呟いた。気の弱い男の顔つきに戻っていた。

「陽人。君は、こんな犠牲が必要だったなんて思わないだろう？この子は空の色も知らないんだ。何の意味がある？」

間断なく響き渡る機械の立てる低い音が聞こえている。大きな水

槽だが、とてつもなく狭い世界だった。陽人は何故こんなものが存在するのだろうか、と、目の前に浮かぶ人物を見つめていた。

(陽人、どうしたの?)

水槽の中の彼が不思議そうにそう尋ねた。陽人は、もう一つ思い出した。

「……必要なモンは、存在するってな。お前だって、コイツだって、誰かが必要だから、必要なモンだから生まれてきた筈だろ?」

また酷く頭が痛み出して、陽人は床に膝をついた。頭の中をネズミか何かに齧り取られているような感覚だった。その内ふつと目の前が暗くなつて陽人は床に倒れ込んだ。そうつと星崎が近づくのが見えた。それを最後に、陽人は目を閉じた。

「うっ、」

星崎が急に胸元を掴み、苦しそうにもがき始めた。ポケットの中からピルケースを探り出し、薄紫色のクスリを口の中に入れて噛み砕いた。荒い呼吸を繰り返しながら星崎がその場で蹲った。

(……啓?)

「なんでもない。何も心配はいらないよ。丁度良かった」

星崎が顔を上げた。しゅう、と空気が圧縮される音がして、自動ドアが開いた。中に入ってきた人物を星崎が出迎えた。

「星崎、」

「やあ。本当に来てくれたんだ、悪いね」

星崎はよろよろと立ち上がると、白衣の男に微笑みかけた。そこに駆け付けたのは水谷だった。

「ああ!」

ついて入ってきたさくらが倒れている陽人に気付いて駆け寄る。その周りには血だまりが出来ていた。陽人は意識を失っているだけだった。

「大丈夫、生きてる。この人も早く手当しないと」

「わかつてる」

水谷は水槽の前に立った。そうして、なにやら複雑な表情を浮か

べた。水谷は振り返り、未だ入口の辺りで立ち止まっている青年に声を掛けた。

「見るかい？」

青年は黙って頷くと、水谷の隣に立ち、同じように水槽を見つめた。青年が隣の水谷の方を向いた。

「これは、俺？」

「そうだな」

またその場に座り込んでいた星崎が激しく咳き込んだ。口元を覆った指の間から吐き出した血がぼたぼたと床の上に落ちた。

「星崎、君は……」

「うん、もうだいぶ前から、わかっていたことだから。僕はもう長くはないよ。クスリでどうにかごまかすのもそろそろ限界かな」

そう言つと、星崎は自嘲した笑みを浮かべた。

「君は、今頃になつて後悔したのかい？連絡を受けた時には、まさかとは思つた。私はあの当時のことはほとんど忘れてしまつていたんだ。星崎、……そうだ、君はあの中では、一番心優しい青年だったね」

星崎はふつと微笑んだ。

「彼の処分を、お願いできるかい？」

水谷は頷いた。星崎がああ、と声を上げ、目を閉じた。

（ねえ、君。僕はもうこれ以上、君の友達を続けることは出来なくなつたんだ。ごめんね。僕は、君のことを助けたかった。幸せにしてあげたかった。一人でも多く、君に友達を作つてあげたかっただけなんだよ。でもそれは自分勝手な、僕のエゴだ。本当にごめんね）

星崎はそう、水槽の中に浮かんだ彼に向けての言葉を話した。静かに、それに答える声が聴こえた。

（……啓、陽人、僕のお友達。うれしいな、陽人はね、僕のことを必要だつて言つてくれたよ。ねえうれしいんだ。啓、……ありがとう。さよなら）

水谷がシステムの停止ボタンを押した。グン、と重い音が響いて、装置の起動が停止した。生命反応を示すモニター画面の数値が徐々にダウンし、やがてはその表示が0になった。

星崎が陽人の方を見やった。

「必要なモノは、か。そう、だから消えるのかい。皮肉なもんだね」
水谷はその間、じっと水槽を見つめ続けていた青年の肩にそつと手を掛けた。

「すまない。漣くんには本当は会わせるべきじゃあなかったのかも
しれない。……私は、君を作り上げるまでに幾多の失敗を積み重ねてきた。そのことに心を痛める仲間の存在にも気付かずだね。本当にすまないことをしたと今では思っているよ」

「……忘れてたで済むレベルの問題じゃねえだろ、もっと完璧に終いしとけよ！なんかもう全部、アンタが諸悪の根源じゃねえかって気がしてきた」

「返す言葉もない」

水谷は分厚い眼鏡のレンズ越しにしよげた目をしていて。星崎は立ち上がると、ふらつく足取りで漣の傍らに立った。

「はじめまして。君が、漣くんなんだね。僕は、星崎」

「ああ、ここに来る途中で聞いている」

星崎はにっこりと笑った。差し出された手を漣は握り返した。

「僕は、君と彼をはつきりと別人だと言い切ることが出来るよ。それだけが、僕に出来ることだ」

灯りの消えた水槽を見て、星崎が笑った。とても悲しい目をして
いた。その目から涙が一筋流れて落ちた。

「僕は、色々と片づけなくちゃならない問題を抱えている。後始末をしなければならんだ。犯してしまった罪の幾らかは、まだ償うことが出来るかもしれない。後は、」

「ああ」

片隅に放置していた松本を肩に抱え、星崎は自動ドアの向こうへと消えて行った。

澁はまだじつと水槽を見つめている。陽人の傷の応急処置を済ませたさくらがその傍らに立った。

「どうしたの？」

「……自分が、普通の人間じゃねえって自覚すんの、サイテーな気分だな」

澁はガラス越しにもう一人の自分を見つめ、その姿に涙を流した。さくらがそれに気付き、ぎゅうと澁の体にしがみ付いてきた。

「澁が居ないなら、俺も居ないから」

「さくら」

さくらが澁を見上げて、にいつと笑った。その小さな体を澁は抱きしめた。水谷がわざとらしく咳払いをした。

再び自動ドアが開いて、足を引きずりながら桃が駆け込んできた。ぐったりと床に倒れ込んでいる陽人を見て、桃が息を飲んだ。

「陽人！」

「大丈夫、彼も早く病院へ送ろう」

水谷の申し出に、桃が困った顔で首を振った。

「ダメなの。理由は言えないけど、普通の病院には行けない」

「ううむ、どうも君たちにも複雑な事情があるようだ。わかった。

安心したまえ、私の古い知り合いに、こういう時につけてつけの闇医者がいるんだ」

「アンター一体何モンなんだよ」

澁が思わずそう呟いた。水谷はここに来る前に応急処置をしたままの桃の足を改めて見た。顔や腕にも、酷い傷を負っていた。

「お嬢さんも、酷い怪我だ。歩けそうかい」

「うん、大丈夫」

澁は桃の隣に立ち、そつと手を差し出した。

「いいから、掴まれ」

「……ありがとう」

撤去作業はひとまず後回しにして、先に病院に向かうことにした。水谷が陽人を肩に担いだ。研究を趣味にしている老人にしては、水

谷も意外なほど力があるようだった。

さくらが水槽を振り返った。

「……バイバイ」

後ろでしゅっ、と空気の圧縮される音が響いた。

さよなら、友達

陽人が再び目を覚ましたのは年も明けた1月2日のことだった。

簡易なベッドの上に寝かされていた。陽人は僅かに目を開いて、辺りを伺うようにして見た。なにかの施設の中だったが、どこなのかはわからなかった。

「気が付いたか。良かった」

傍らでイスに座っていた男が安堵した声を出した。

「アンタは……」

「ああ、気にしなくていい。私は知り合いの男に頼まれて君の治療をしたただけだから」

男はそうとだけ言っつて、またなにやら机に向かって書き物を始めた。ずいぶんとぶつきらぼうな態度だ。陽人は自分の上半身に巻きつけられた包帯を見た。誰か知らないが、どうやら自分は助けられたいらしい。

「すまねえ、世話になった」

男は微笑むと、陽人の肩を軽く叩いた。

「陽人！」

ばたん、とドアの開く音と殆ど同時にそう叫んだ桃が、どうにか上体を起こした陽人に飛び掛かるようにしてしがみ付いてきた。桃の腕が思いつきり腹の傷口を抉った。

「ぐえ」

「よかった、ほんとに、よかったよお」

桃はそのまま、しゃくり上げるようにして泣き出した。陽人の背中に回された腕が震えていた。

「全く、相手は死にぞこないのけが人なんだ、今ので止めをさしかねなかったぞ」

男が窘めるように言った。

「まあ、君が眠っている間中ずつとここで看ていてくれたんだ、私

よりその子に礼を言ってあげてくれ」

陽人は自分をぎゅうと抱きしめている桃を見た。長かった髪の毛が、ばつさりと短く切り揃えられていた。よくよく見れば、彼女自身も未だ癒えない傷でボロボロだった。

「心配かけてごめんな」

「……うああん、」

桃は気持ちを堪えきれずに声を上げて泣きだした。その様子は本当に普通の17歳の女の子だった。

「桃、俺は大丈夫だから。そんなに泣くなよ」

「……あたしの所為だ。あたしが、陽人もみんな巻き込んだの。平助だって」

「お前の所為じゃねえって。頼れつつつといてコレだよ。情けねえや」

「だって……」

桃は目元を擦ると、ポケットを探った。その中身を陽人の手に平に握りこませる。陽人が指を開いた中に見たものは、どこか見覚えのある銀色の指輪だった。

「これって」

「あたしが、あいつらに関わったせいで、平助、死んじゃったんだよ」

桃はまたぐすぐすと鼻を嚙るようにして泣いた。

陽人は気を失っていたので覚えがなかったが、ホテルで大けがを負った2人を助けたのは星崎によって呼び出された水谷達だった。途中の廊下で、帽子を被った男に襲われかけた桃を、漣とさくらが見つけた。桃の足の手当をしながら、さくらが言った。

「ねえ、もう一人、連れの人がっている？」

桃はさくらの問いかけに、そういえば平助がどこかへ行ったきりなことを思い出した。

「ええ、」

「眼鏡掛けてる男の人？」

「……そう、だけど」

さくらがああ、と声を上げた。あまり良くない反応だった。
「何かあったの？」

しばらく黙り込んだ後、さくらが言いにくそうに話した。ここに来る前、入口の近くでとんでもない惨状の死体を見たのだ、と。先に水谷によつて運び込まれていた。桃が対面したのは確かに平助だった。静かにその目を閉じていた。押し黙った彼はもう、いつものように下らない軽口を利いてはくれなかった。

あれから3日が過ぎていた。陽人が目を覚ます前に、もう全て終わっていたのだった。

陽人は桃の話す言葉の意味を上手く理解出来なかった。あの、星崎に打たれた妙なクスリの所為で、頭が酷く痛かったのだ。

「はは……なんだよ、そりゃ」

陽人は頭を抱え込んだ。なんだか酷い眩暈がした。ぎゅう、と握りこんだ手の中に、指輪の感触があった。男にしては細指の彼が薬指に嵌めていたものだ、母親の形見だった。指輪はもうたくさんと陽人は思った。

「……惚れたんだろ？」

陽人の耳元で、平助の声が聴こえた。記憶の中の声だった。

「俺も、ヒナに協力してやるよ」

「陽人、もっとこうちゃんとしたカツコしろ、せつかくそこそこ力ツコいいのにもつたいねーよ」

「わかんねえ？」

「俺はいつだつてお前の為になりてえなああって思ってたんだよ」

平助の姿が、目を閉じた陽人の真つ暗な視界の中で浮かんだ。へらへらと能天気な顔をして笑っていた。酷い頭痛がして、その姿がかき消されるように歪んだ。後には、何も残っていなかった。

陽人が満足に体を動かせるようになったのは、目を覚ましてから

また3日が過ぎた頃だった。十分と言える医療設備はない、隠れ家のような場所で陽人は体を休めていた。

そこでは水谷という男の古い知り合いだとかいう、初老の男が一人で訳ありの連中の面倒をみていた。治療行為をしているが、男に正式な医者免状は与えられてはいないようだ。訪れるのは皆、息を潜めて生きている者たちばかりだった。桃が自宅に戻ってからは、陽人に与えられた食事はいつも味気ないコンビニ弁当だった。男と同じものだ。

「陽人、調子はどうなの？」

陽人の元にマリーが様子を見にやってきた。マリーはその表情にどこか暗い影を残してはいるが、体の方はすっかり回復しているようだった。簡素な施設内で場違いに派手な配色のドレスを身に着けていた。マリーは差し入れに、まだ温かい手作りの惣菜が入ったパックを持ってきていた。

「サンキュー、マリー。ここんとこずっとロクなモン食ってなくてさ」

「あら、アンタ普段と大して変わんないでしょ、コンビニとかそんなんばつかじゃないの」

マリーがふふつと笑った。

「ヒマだからね。アタシだって料理の一つくらい出来るわよ。他にすることなくってさあ、嫌んなっちゃう」

ため息交じりにマリーが言った。本当には片づけなければならぬ仕事如山積みになっているが、今は考えたくもなかった。表向きの会社は畳むことに決めた。ビルが破壊されたこともあり、復旧の目処が立たなかったのだ。

しばらくして、今度は桃が様子を見にやってきた。桃はマリーを見ると、嬉しそうに笑った。

「マリー、良かった。元気そうで」

「アンタもさ、大変だったね。このバカがずいぶん世話になっちまうって」

「そんなの。ああ、今コーヒーでも淹れるわ」

桃は少し寂しそうに微笑むと、奥の給湯室へとお湯を沸かしに行
った。

「陽人、実はさ、さっきヒナのことと病院から連絡があつたんだ。
あの子が目を覚ましたって」

「……ヒナが、」

マリーは頷いた。

「陽人、アンタ動けそうかい？ヒナね、なんだか酷く不安定になっ
てるらしいんだ。なんでも事故の後遺症らしくてね、怯えてるって。
あの子の力になってやれるんならさ、アンタが見舞いに行つてやり
なよ」

「ああ、わかった」

陽人はそろそろとベッドから起き上がった。力が加わると、まだ
傷口が痛んだ。顔を顰めた陽人にマリーが手を差し出す。

「肩貸してあげるよ」

「大丈夫だよ、ババア無理すんなって」

「……ほんつとーに、口の減らないガキだわ」

マリーは冗談で陽人をぶつたたいてやるうとして、ふつと微笑ん
だ。落ち着いたその顔にはまた暗い色が混じり込んだ。

奥からカップを持った桃が戻ってきた。

「どうしたの、陽人、まだじつとしてなきゃダメよ」

「もう平気だよ。いつまでも世話になつてるわけにもいかねえしな」
陽人は別の部屋で患者を診ている男を見つけ、声を掛けた。男は
手を振り、いって、と素振りだけで返した。金銭のやり取りにつ
いては、友人の紹介ということとか、男は何も言わなかった。

元の精華台病院に搬送され、4人部屋の中の窓際にあるベッドに
ひな太は寝かされていた。病室にはひな太以外の入院患者はいなか
った。しん、と静まり返った中で一人、ひな太はぼんやりと窓の外

の景色を眺めていた。

「斉藤さん、」

看護師が呼びかけたが、ひなたは聴こえていないのか身動き一つしなかった。案内されるまま、陽人は病室に足を踏み入れた。

「……ヒナ、」

ぼんやりしていたひなたが、その声に反応した。上体を起こし、陽人を見上げる。見る間にその表情が変化して、ひなたはその両目からぼたぼたと涙を零しはじめた。陽人がベッドの傍まで近寄ると、ひなたがぎゅうとしがみついてきた。陽人の赤いジャケットに顔を埋めている。

「どしたんだ」

「陽人、怖かった、怖かったよう」

ひなたの声はくぐもって聞こえた。さっきまでの抜け殻だった様子が嘘のようだった。

「大丈夫、もう大丈夫だからな」

宥めるように、陽人はひなたの髪をそっと撫でさすってやった。

ひとしきりひなたの気が済むまで、陽人はずっとあやすようにその背中を撫でた。少し落ち着きを取り戻したころになって体を離すと、ひなたの涙で濡れた顔をそっと拭った。

陽人はポケットを探り、ひなたの手を取るとそこにあの指輪を嵌めてやった。紫色をした石は砕けてなくなり、今は台座だけになってしまっている。ひなたの指にはやはりまだ大きすぎるようだった。「また、お前の指輪を届けに来たんだ。でも壊れちまってんな、ゴメン」

ひなたがううん、と首を振った。

「ありがとう」

ひなたはしばらくの間、自分の指に嵌められた指輪をじっと見つめていた。

「……ヒナね、ずっと起きるの怖かったよ。目が覚めたら、また一人ぼっちになるんだって思ったら怖かったの。でも目が覚めたから

また陽人に会えたよ」

「そっか」

ひな太が照れたようににこつと笑った。

「あのねえ、ヒナ陽人にお願いがあある」

陽人は笑って頷くと、ヒナ太の額にそつと手を押し当てた。ひな太が安心したようにほつと息を吐いた。

「……クリスマスだってえのに、ツイてねえ奴だ」

瞬間、陽人の声がひな太の頭の中に直接響いてきた。

「何……、」

「……斉藤正幸ってのはアンタだよな？なんだよこの指輪、ああ、なんだってんだ。俺もツイてねえなあ、面倒なモン引き受けちまってさあ、息子？マジかよ、ひな……」

「なんだ、どうしたんだ、ヒナ？」

「あああああ、」

ひな太は頭を抱えて、がたがたと震え始めた。陽人の持つ記憶が、ひな太の中に流れ込んできたのだ。陽人の声が、触れた手の平から直に伝わってきていた。

陽人はひな太の肩を抱くようにして支えた。すつと陽人を見つめ返したひな太の目が、あの紫色の光を帯びていた。まるで人形のように表情がなくなっていた。陽人ははつとした。それが何なのか、何が起きたのかが何となしにわかったのだ。

「陽人、」

しばらくたつて、ひな太がそう呟いた。力のない声だった。

「どうしたんだよ」

また長い沈黙があつた。ひな太の紫色の両目が陽人を見つめてい

る。
「陽人、ヒナのお父さんを殺したのは、陽人だったのね」

「……そうだよ」

「どうして、どうしてなの？」

「それが、俺の仕事だから」

陽人はそつとひな太の傍を離れた。ひな太がまた泣きそうな顔を
している、ぼと、と一筋の涙が零れ落ち、ひな太が急に頭をガリガ
リと掻き篋り始めた。

「ヒナ、」

「うああああん、」

ひな太の鳴き声で、異常を察知した看護師が駆け寄ってきた。ひ
な太は何事か大声で泣き叫んだあとで気を失って倒れた。医師が呼
び出され、陽人はそつと病室を後にした。

翌日。ずいぶんと風通しのよくなったテナントビルの応接間で、
陽人は病室であったことを桃に話した。桃は考え込むように右手を
頬に当てていた。ソファに深く座り込み、陽人は頭を抱えている。
奥ではマリーが荷造りを始めていた。今夜にでもここを引き払う予
定だった。

「あの子、陽人の心の中を読んだみたいだって、そういうのね？」

「ああ。何かさあ、ヒナの親父さんはそういう妙な力があつたつて
え話だしさ、ありえねえことでもねえなあつて」

桃はふうん、と再び考え込んだ。それから、気が付いたことがあ
つた。

「事故のあつたところには、例のクスリが砕け散つてたのよね。な
んかのはずみで、あの子の中にクスリの欠片が入つたのかも。それ
で、あの子は何かの能力者になつて、陽人の心を読んだ」

「サイテーだ」

陽人はソファの背もたれに押し掛かつて、手の平で顔を覆つた。
「考えすぎかもしれない。でも、ありえない話じゃないでしょ？そ
れはそうと、アンタは大丈夫なの？アンタも星崎にあのクスリを打
たれたんでしょ？」

陽人はうーん、と声を上げた。

「わからん。いや、正直よく覚えてねーんだよ。あの後気がついた

らあそこで寝てたしなあ。はは、じゃあさあ、俺も超能力とか使えるのかな？」

「笑い事じゃあないわよ」

桃が呆れたようにため息を吐いた。

「それより、本当はまだ痛むんでしょ？」

「んなこと言つてられねえし」

陽人はよつと声に出して、勢いをつけてソファから立ち上がった。最後にヒナの顔見れたんだ、もう心残りはないな。俺らはまたどこか別の町で暮らすわ、所詮行くあてなんかねえノラ猫だしな」

「そんないいもんじゃないでしょ、バカじゃないの」

陽人はハハ、と笑って答えた。

不意に沈黙が訪れ、聴こえるのは奥でマリーが立てる音だけになった。2人とも同じことを考えていた。先に口を開いたのは桃だった。

「あの子のこと、アンタはあれで済みにするつもり？」

「ああ、」

「謝ったりとかしないんだ」

「……俺は、ヒナに許してもらうつもりはねーから」

ひゅー、と大きく開いたままの窓から、冷たい風が吹いていた。

缶コーヒートを両手で覆うようにして暖を取っていた桃が陽人を見つめている。陽人は意図的に逸らしていた顔を、ようやく桃の方に向けた。

「お前見てるとき。……俺は卑怯者でよかったんだよ、ヒナにはいい夢見せてやりたかった」

「サイアクな形でバレちゃった、」

「まあな」

陽人のポケットに突っ込まれた携帯電話が鳴り出した。陽人はまさかとは思いつつ、画面表示を見た。直感的に、そうだろうと思つた。陽人は通話ボタンを押してみる。

「……もしもし、」

相手は何も言わなかった。人々の話し声が後ろで聞こえてくる。アナウンスの音が聴こえた。そこが病院のロビーだと確信した。「ヒナ？」

結局なにも言わないまま、30秒程で通話は途切れた。携帯を元のようにしまうと、陽人はマリーの元へと駆け出した。

「なあマリー、俺ちよつと出かけなきゃなんねえんだ、悪い！」

「なによ、アンタどこ行くつもりなの？」

マリーは陽人の顔を見ると、ああそう、と言うような顔をした。そうしてトランクの中からもなやら封筒のようなものを取り出すと、陽人に押し付けた。

「ヒナんところに行くんだろ？別に構やしないよ。アンタ居なくなつて一人で十分だし」

「サンキュー、ババア！」

「だから一言多いんだよアンタは！」

マリーに応戦するように、オブシディアンが「あ、と鳴いた。桃が携帯電話を取り出して掛けている。

「陽人、車を呼んだわ。あたしも一緒に行ってもいい？」

「ああ、ありがとうな、桃」

病院の休憩室で長椅子に座っていたひな太は、昨日よりも幾分か落ち着きを取り戻していた。陽人達が着いてからもずっと、何も言わずに俯いていた。その体が僅かに震えている。

ひな太はここ一週間程でずいぶんとやつれて見えた。ピンク色のパジャマに明るい黄緑色の上着を羽織っている。

陽人がふう、と息を吐いた。ひな太がゆっくりと顔を上げて、ようやく陽人を見上げた。どこか睨み付けるような色を持った強い視線だった。

「……陽人は、人殺しなの？」

「ヒナ、俺は、お前にすまねえことをしたと思ってる」

くつと息を吸い込んだひなたが力任せに陽人を叩いた。何度も、ただその腕には殆ど力が入っていないかった。

「謝って済む問題じゃないよ！」

「そうだな。俺は、お前に謝りに来たわけじゃねえよ」

ひなたが顔を上げた。その両目から溢れ出した涙が流れて落ちた。「どうして、」

「俺はさ、お前の言うとおり人殺しだよ。でも俺は警察に捕まるなんてのは真っ平ごめんだ。申し訳ねえつつつて自首なんかするつもりもねえ。それに俺らはもうこっからはとんずらさ。ヒナ、もう会うこともねえだろうな」

「……陽人？」

陽人は僅かに身を屈めてひなたと視線の位置を合わせた。その震えている肩を両手で抱え込んで、真正面から向かい合った。

「ヒナ、俺はさ、お前に謝って済むことじゃねえってわかってるし、勿論許してもらおうなんて思ってたねえよ。人の命だ、そんな軽いモンじゃねえだろ。罪を償うなんてことそんな簡単に思ってたんじゃないぞ」

ひなたはじつと陽人の顔を見つめていた。いつの間にか泣き止んで、その目が不安定に揺れていた。

「……ヒナは、陽人のこと、許せないと思う」

陽人はふう、と息を吐き出した。ひなたの肩にぼん、と手を置き、それから立ち上がるうとした。ひなたが陽人のシャツをぎゅうとつかんで、その中に顔を押し付けた。

「……でもヒナ、陽人のことどうしても嫌いになれないの。……ねえ、どうしたらいいの？だって、陽人は、ヒナのとっても大切な人だった一人の大切な友達なんだよ」

ひなたはそつと顔を離して、その手の平を陽人の左胸の辺りに押し付けた。指先から、妙に温かい気持ち溢れて、流れ込んでくるような感覚があった。ひなたがふつと穏やかな微笑みを浮かべた。

「陽人が、今までずうつとヒナのこと大事に思ってたこと」

もわかつたの。嫌いになんてなれないよ、……陽人が、もつとサイテーな人間だつたらよかつたのに」

「俺は、今でも十分サイテーだよ。勘違いすんな」

陽人はひな太の頭を軽くはたいて、休憩室を出て行った。ひな太は支えを失つたようにその場に崩れ落ちた。桃がそつとその体を支えるようにして座り込んだ。

ひな太の病室前の通路で、陽人はひな太の祖母に再び出くわした。彼女は陽人のことを覚えていいのか、僅かに怯えた様子をしていた。陽人は持つてきていた分厚い封筒をその老女に手渡した。中には斉藤に振り込まれた金がそつくりそのまま入っていた。老女が驚いて、引き攣つた顔で陽人を見た。

「これは俺が、ひな太の親父さんから預かつてた金です。どうか、ヒナのこと幸せにしてやってください。それじゃあ」

深く頭を下げ、陽人は再び歩き出した。正気に戻つた老女が何事が言いながら追つてきているようだったが、振り返りはせずそのまま病院を後にした。

ひな太は冷たい床の上に座り込んだまままた泣いていた。桃がそつと慰めるようにその肩を抱いた。

「辛いよね。……でも、人を憎んでもなんにもならないんだよ。復讐なんかしたつて、ただ虚しいだけ」

ひな太は目元を擦ると、桃の顔を見た。桃がにこ、とひな太に微笑みかけた。

「アンタは、あたしみたになつちゃダメだよ」

ひな太はまた、ぐすぐすとしきりに目元を擦っていた。堪えることが出来ずに涙が後から後から溢れ出してきた。桃は何も言わずに、そつとヒナの体を抱きしめていた。

先に支度を終わららしいマリーが病院の入り口で陽人を待ち構えていた。陽人が苦笑いを浮かべて手を振った。ずき、とまた差し込

むような頭痛がして、陽人はこめかみの辺りを押さえた。

マリーが用意したレンタカーの助手席に乗り込んで、陽人がドアを閉めると同時に車は発進した。

「なあマリー、今度はどこ行こうか」

「さあねえ。とりあえずアタシはこの子たちと一緒にならどこでもいいわ」

後部座席を占領して、猫たちの入ったケージが積み込まれていた。トランクも猫のためのもので占領されている。マリーと陽人は殆ど身一つの状態だった。必要だと思えたものは思いのほか少なかった。特に行先も決めずに走る車の中、陽人は流れていく町の景色を眺めていた。

「またさあ、3人でさ、今度こそもつと儲かる商売始めようぜ。それにしてもさあ、平助の野郎一体どこほつつき歩いてんだか」

「え？」

「置いてつちまうぞー全く。なあマリー？」

マリーは陽人を見た。その顔は全くいつもと同じだった。冗談を言っているわけではなさそうに思えた。

「陽人、アンタ……」

「へ？」

マリーの顔色が妙なことに気付いて、陽人が首を捻った。

陽人の手の中に、平助の指輪がある。鎖に通して首から下げている。陽人はそれをつまんで持ち上げ、小さな輪っかを通して窓の外を見つめた。

マリーの運転する車はあてもなく南下し、海の見える町からは遠く離れて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9456t/>

Christmastide

2011年12月14日00時48分発行